



「横山隆一記念まんが館」

目次

■平成14年度学会研究テーマと課題

ミュージアム・マネージメント=コミュニケーションの創造= /JMMA理事 沖吉 和祐2

■論考・提言・実践報告

市民参加型博物館の運営に関する提言 ～公立博物館の課題について～

/入間市役所市民部自治文化課 今井 正美4

『岩手県におけるエコミュージアムの現状』 ～構想を策定した釜石市、大槌町、西和賀地域の三事例～

/株式会社邑計画事務所 石崎 泰子、熊谷 智義7

九州国立博物館（仮称）の誘致運動と九州国立博物館設置促進財団の活動について

/財団法人九州国立博物館設置促進財団 前田 利輔14

■時の話題

地域小規模資料館における市民参加の展示-地域社会が支えるミュージアムの一つのあり方-

/株式会社乃村工藝社 斎藤 玲子17

ヨーロッパの科学系博物館をネットするECSITE—その目的と役割

/Walter Staveloz19

「ミュージアムグッズ人気コンテスト」にみる企業ミュージアムのまなざし

/NPO法人企業ミュージアムの協会 亀田 訓生20

まんが文化とまんが館—「横山隆一記念まんが館」の開館

/株式会社文化環境研究所 高橋 信裕23

■支部会だより

東北支部第2回大会の開催

/東北支部長 兼松 重任25

■新刊紹介

『博物館学への招待』

/株式会社文化環境研究所 高橋 信裕26

■インフォメーション

.....27

平成14年度学会研究テーマと課題

ミュージアム・マネージメント

＝コミュニケーションの創造＝

JMMA 理事

沖吉 和祐

平成14年度からの学会研究テーマが決まった。最近3年間「リレーションシップ」をテーマに研究を重ねてきたが、今年度から「コミュニケーションの創造」をキーワードに活動を展開していく。この新しいテーマを設定した背景を概説するとともに、本学会が取り組むべき課題を提起したい。

1. 学会創設の理念

本学会は平成7年3月に設置され、8年目を迎えている。変革の時代にあって、博物館と産業界、関連学会等とネットワークを図りつつ、社会の期待や要請に対応したミュージアム・マネージメントの研究を行い、その成果を人々の生活文化の発展に生かすことを目指して活動を開始した。

学会の設立準備委員会で、学会名について種々議論があった後、大堀氏（現会長）から意見を求められ、「ミュージアム・マネージメントは、その意味する内容が明らかでないが、却ってそこに新鮮な魅力がある。実はこれから育てていこう」と発言したことを思い出す。

その背景に、平成5年度の全国科学博物館協議会の博物館現職研修がある。この年の研修テーマが「ミュージアム・マネージメント」であった。当時、この協議会の会長であった川村恒明氏は「お客様のニーズに最大限こたえるのが私たちの仕事」と明快に語った。本学会の関係者も多数参加し、中川志郎氏は「博物館が、社会のどの位置に何のために存在するかを踏まえたトータルマネージメントが必要」とし、大堀哲氏は「自己完結方式では十分な活動は不可能であり、連携の内容・方法について研究することの重要性を強調している。博物館の目指す方向として、堀由紀子氏は「専門性の充実ときめ細かなサービス」を、斎藤温次郎氏は「個性豊かな博物館」を提案している。

本学会スタートに当たり、「博物館」とせず「ミュージアム」としたのは、研究対象を狭義の博物館に限定せず「まち」を初めあらゆる場をミュージアムとしてとらえようとしたこと、その「ミュージアム」も旧来の概念に束縛されず自由な発想で考えようとしたからである。

また、「マネージメント」としたのは、経営、運営、管理といった語感に影響されることなく、取り組む姿勢や態度を重視し、それを「ミュージアム」に新風として吹き込みたかったことによる。

2. 本学会における研究の歩み

本学会における研究活動の姿は、各年度の総会にあわせて開催されてきた大会のテーマに現れている。

大会のテーマ

- 第1回（平成8年）：ミュージアムがつくる新しい文化
 第2回（平成9年）：新しい時代をつくるミュージアムの可能性
 第3回（平成10年）：時代の転換とミュージアム
 第4回（平成11年）：地域社会とミュージアム
 ～共立するミュージアムマネージメント～
 第5回～第7回（平成12～14年）：
 21世紀のミュージアム・マネージメント
 ～ミュージアムとリレーションシップ～

第1回の大会では、泉真也氏の特別講演で「博物館」と「ミュージアムステイツ」の提案があった。私自身が取り組んできた、大学全部を博物館化するユニバーシティ・ミュージアムの考えとも共通するものであり、「ミュージアムがつくる新しい文化」は、本学会の創設の契機となった考えでもある。

時代との関わり（第2、3回）、そして、地域との関わり（第4回）の研究を経て、第5回から主テーマがリレーションシップとなった。色々な場における人と人、人と自然、人と人工物・・・の関係、その関係の成長と時代的な発展を総合的に見ようとの試みであり、世紀間のリレーションシップということを念頭に置いていた。

3. 「コミュニケーションの創造」の背景

今年度からのテーマになった「コミュニケーションの創造」について、個人的なコメントをしたい。

(1) 情報化の認識

社会の情報化、情報化社会、(高度)情報社会の意味するところはそれぞれ異なるが、共通的に言えることは、先ず、技術の高度化により情報の収集、処理、蓄積、保存、再生、移動、伝達等が速く、大量に、かつ正確に、少ない負担で、実行できる社会ということである。

その結果として、情報量（殆どが再生産情報）が激増し、選択能力により格差が生じる厳しい社会、行動が情報に影響されやすい社会ということが言える。

また、これまで困難であったり不可能であったこ

とが比較的手軽に実現（疑似体験）できる社会もある。

一方、本物、実物、現地、自然といった1次情報そのものの絶対的価値が相対的に高まり、実体験の大切さが、学校や、家庭、地域で認識されるようになった。

このバランスをどのようにとるかが、「ミュージアム」の「マネジメント」の醍醐味である。学校5日制が実施され、また、総合学習が本格化する中で、組織的・非組織的連携が課題となっている。

(2) コミュニケーションの成立

ネットワークは、同じような目的を持つものの緩やかな契約関係で成り立つ社会的なつながりとするれば、リレーションシップは、ある場面において様々な目的を持つものの自由意思で成り立つ相互関係ととらえることができる。結果として、同じ目的意識を共有しあえることが期待できる。

コミュニケーションは、ある目的を達成するための過程で成立するものであり、ネットワークの形成過程、リレーションシップの成長過程における重要な要素である。過程において、予期せぬ大きな発見があったり、思わぬ効果が生まることが特徴である。また、コミュニケーションの水準が、情や意に大きく影響されることを認識しておきたい。

近年、目的の達成よりも、目的設定の過程、目的達成の過程が重視され、場合によっては、過程におけるコミュニケーションそのものが目的となるようにもなってきた。

ミュージアム・マネジメントにおいて、コミュニケーションは、ネットワーク、リレーションシップとともに欠くことのできない要素である。

(3) 創造の時代

農耕社会を支える「土地」、工業社会を支える「資本」と「機械」、そして、後期工業社会を支えるのが「情報」とともに「知」をあげることができる。工業化が進むなかで、「知」は成長を遂げてきたが、いま求められるのは新しい「知」の創造と受け継がれてきた古い「知」に息吹を与え再生（再認識）することと、それを基礎とする新しい「知」の創造である。

国際化が進む一方で地域化の重要性が指摘されている。その基本は、地域の特色である「知」を、再生し創造することにある。これこそミュージアムの本質であり、それを「実現していく過程」をいかにマネジメントするかが課題である。その際留意すべきことのひとつが、個における知の内部化と外部化（個人化）の問題であり、そこに「コミュニケーション」が介在するということである。

このような背景を踏まえつつ、「コミュニケーションの創造」のテーマで、ミュージアム・マネジメントを共に考えていきたい。

4. 本学会の課題

設置後8年目になる本学会も、これまでの成果を基礎に、さらに新たな発展を目指す時期にきている。21世紀を迎え、国民の意識や社会の要請も、設置当初に比べかなり変わってきた。いま、ミュージアムは極めて厳しい社会状況に置かれているが、ミュージアムの役割とそのマネジメントの重要性はますます高まっている。本学会が取り組むべき課題を会員の皆さんとともに考えてみたい。

(1) 活動成果の点検・評価

設置後8年間の活動成果＝総会・大会の開催、研究部会の状況、支部会の設置、各種事業の企画、会報の発行、ホームページの開設、理事会等の開催、普及活動等を整理し、まず自己点検と評価を行うとともに、外部の有識者による評価や指導を受けることを検討したい。

(2) 「ミュージアム・マネジメント」の再認識と普及活動成果の点検・評価を踏まえ、本学会が掲げる「ミュージアム・マネジメント」の考え方を今一度まとめ直し、会員間で共通理解を図る。

最近の社会状況を分析し、今後、学会が果たすべき役割を明確に示すとともに、共に研究しようとの意欲をもつ仲間の輪を広げていく計画をつくりたい。

(3) 社会的認知と社会的責任

ミュージアム・マネジメントの重要性と本学会の存在についての社会的認知を得るとともに、学会として社会的責任を負い、社会的な役割を果たしていくことが必要である。

その一環として、現在、日本学術会議の学術研究団体としての登録手続きを進めているが、組織のより安定的な運営を図るため、法人化についても考えるべき時期が来るだろう。

(4) 中長期的な視点に立った学会のマネジメント

会員の和を深め、その活動水準を高めるとともに、一般市民に対するサービスを充実していくため、中長期的な目標を定め、数年にわたる活動計画を策定する。また、ミュージアムの評価、人材の養成・能力のリフレッシュ、マネジメントについての具体的な相談などに、学会としてどの様に係わっていくかの議論も必要であろう。

また、事務局体制の整備や会のマネジメントへの会員の参画についての検討が必要である。

会員の皆さんの積極的なご提案、ご意見を期待したい。

(JMMA理事、第8回大会担当、
将来構想検討委員会委員長)

論考・提言・実践報告

市民参加型博物館の運営に 関する提言

～公立博物館の課題について～

入間市役所市民部自治文化課主査（市民文化担当）

今井 正美

はじめに

公立博物館を取り巻く情勢は、現在、大きな転換期にさしかかっていると思われる。多くの国立博物館においては独立行政法人化が進み、「博物館経営」という視点から博物館そのものの運営や活動のあり方が見直されようとしている。また、市民のさまざまな生涯学習活動の高揚によって、「市民参画」というキーワードのもとに、博物館に対する期待や要望も高まりつつある。さらに2002年度から完全実施された公立小中学校の「総合的な学習の時間」に対する受け皿として、博物館がどのような関わりを持つことができるか、など今後の課題も山積している。これに対し、これまで先駆的な役割を果たしてきた企業や財団経営の博物館・美術館が、今日の厳しい経済状況のもとで、相次いで閉館されるという厳しい現実も横たわっている。このような情勢の中で、公立博物館が博物館としての存在基盤を保つためには、これまで「お客さま」であった市民を、博物館の理解者や応援団として運営に参加してもらうことではなかろうか。旧来のような博物館からの一方的な働きかけだけではなく、市民との協働による運営を模索していくことが、博物館運営の専門職である学芸員が取り組むべき課題であろう。本稿においては、私が入間市博物館在職中に担当した市民ボランティア組織設立の経験などをもとに、市民参加型博物館を実現していくうえで、今何が公立博物館に求められているのかを検討してみたい。

課題の明確化

博物館という組織とその主要な構成員である学芸員にとって必要なことは、一般論としての博物館の課題と、実際に自分が勤務している職場の具体的な課題を明確にすることであろう。一般論とは、「博物館」がこれまでの社会や制度の中でどのように位置づけられてきたのか、今後はどのような方向に向かおうとしているのかを客観的に検討することである。「具体的」とは、自分の博物館の設立背景（書面に書かれている表の背景だけでなく、政治的・経済的な裏の背景も含む）を踏まえて、市民ニーズを的確に捉えようと努力することである。その結果として、

個別の公立博物館ごとに課題やその緊急性、優先順位などが明確になるはずである。1981年から1999年にかけて中央教育審議会や生涯学習審議会が出したさまざまな答申書の内容を吟味すると、博物館の運営や活動と市民の生涯学習活動の成果の関連が、いかに重要な位置づけにあるかが明白である。博物館は、生涯学習活動を単に援助する対象としてではなく、博物館の機能を十分に発揮していくためのパートナーとして、いかに受け入れていくかを具体的に検討する時期に至っている。

では、入間市博物館においては、どうであろうか。入間市博物館が開館した当時は、いわゆる「博物館建設ブーム」の一端にあった。しかし、その一方では「博物館離れ」が深刻な問題とされた時期でもあった。このような状況のもと、1994年の開館に先立つ1990年6月に、入間市郷土博物館等建設審議会より運営の指針となる「入間市郷土博物館等建設基本計画について答申」が出された。この答申書には当館の設置目的や運営の柱となるような事項を示した「基本構想」と題する部分があり、そこでは、生涯学習時代における市民のさまざまな活動に対応することにより「市民の心のよりどころ」となり得るような施設づくりが目的として謳われており、その実現のための重要な活動として「市民の生涯学習の場を十分に考慮した社会教育機関とする」、「市民参加の博物館運営」、「博物館ネットワーク化に対応できる体制」などの項目が挙げられている。これが入間市博物館の運営の原点である。

入間市博物館の新たな試み

入間市博物館では、さまざまな経緯を経て2001年12月から（仮称）入間市博物館運営協力会^{*1}という名称で市民スタッフを募集し、約40人の個人と2団体の参加を得た。それまでも事業ごとに単独でボランティアを募集していたが、これらの活動は、単独に実施されたものであり、相互の関連については希薄な状態であった。運営協力会という新たな形のボランティア活動を設立するきっかけの一つは、ここにあった。せっかく多くのスタッフが参加していても、縦割りの活動形態では、発展性に欠ける。スタッフが事業の垣根を越えてフレキシブルに活動できれば、さまざまな考えや意見を出し合って、ボランティア活動が活性化し、その結果として、博物館の活動そのものの幅が広がり、質が向上し、市民の生涯学習活動の場としての機能強化が図られると考えたからである。運営協力会の設立目的には、「博物館の設立主旨と活動目的に賛同し、運営を市民サイドから支援する組織として、博物館のさまざまな分野において行政と市民が相互に協力し、役割と責任を分担して、一般利用者の利便に供する活動を行うことを主目的として設立するものです。また、上記の活動をとおして、会員自らの知識や技能を高め、博物館が市民の活動拠点の一つとなることを併せて

設立の目的とします」と示されている。前半の主目的の内容は、まさに博物館法第2条あるように博物館の機能を行政と市民が協働で担うことを意味しており、後半の目的は、スタッフ自身が博物館を生涯学習の場として活動することを意味している。

募集時の活動内容は、「事業支援スタッフ」、「解説スタッフ」、「広報スタッフ」、「館庭整備スタッフ」の4分野に分かれ、それぞれに実際に活動するメニューが付属している。

「事業支援スタッフ」は、さまざまな講座・体験学習・茶会などのイベントに関するものであり、①体験・実演指導（特別展示や体験学習において、昔の生活道具の使い方や作り方などを子供達に指導していただくような内容）、②サイエンスバーの運営（常設展示「こども科学室」にある体験コーナー「サイエンスバー」において子供たちを対象とした簡易実験の企画や実演指導）、③定点写真撮影（市内の一定地からの景観を定期的に撮影し、その遷り変わりを写真に記録する）、④イベント支援（博物館で開催される茶会等のさまざまなイベントの企画・準備・運営・片付けなどを行う）の4メニューで構成されている。



体験講座の受付をしている事業支援スタッフ

「解説スタッフ」は、常設展示室やバルコニー・館庭などで、さまざまな分野の解説を行うものであり、①バルコニー解説員（博物館のバルコニーから実際に風景を見ながら地形解説や気象解説を行う）、②植物解説員（四季折々に、館庭の植物の解説案内やネームプレートの設置などを行う）、③語りべ解説



植物解説員の研修風景

員（常設展示室や特別展示の会場で昔の生活などについて解説を行う）の3メニューで構成されている。

「広報スタッフ」は、博物館で行われる事業の広報活動や外国人来館者のサポートなどを行うものであり、①広報誌制作（現在発刊している広報誌の企画・取材・執筆・編集などや運営協力会の会報の制作）②ホームページの企画更新（博物館の最新情報やイベント案内などの制作・更新）③外国人来館支援（外国語によるガイドブックの製作や展示案内）④ポスター等の発送や配布の4メニューで構成されている。



編集会議中の広報スタッフ

「館庭整備スタッフ」は、博物館敷地内をさまざまな形で整備するもので①草花の植栽と管理（季節ごとに草花の植栽計画を企画し、実際に草花を植えて定期的な維持管理を行う）となっている。



館庭で活動中のスタッフ

これらメニューは、博物館と市民スタッフが最初にとりかかる実験的な内容である。今後の博物館の運営（経営）において、市民の力（経験・知識・技術・人脈など）と博物館職員の力が相乗的に結びつき、今以上に博物館機能や活動の充実が図られることを

願っている。

市民参画による博物館運営の展開に向けて

博物館、とりわけ公立博物館は、市民の生涯学習活動と密接に結びついており、市民にとっては、博物館が魅力ある活動の場として認識され始めているのではなかろうか。冒頭にも述べたように、公立博物館が市民にとって必要不可欠で魅力ある施設となるためには、市民を積極的にスタッフとして取り込んだ運営を展開していくべきだと思う。

その第一歩が、新しい博物館像を構築するためのプラン作りであろう。

そこで必要となってくるのが、博物館職員（特に学芸員）の意識改革である。博物館法第4条にあり、学芸員は博物館運営の専門的事項を司る職員であった。しかし、自分を謙虚に、客観的に見直してみても如何だろうか。公立博物館には公益性が求められている。つまり、多様な市民ニーズに如何に対応できるのかが問われているのである。学芸員の方だけで市民に対する義務を果たすことができるだろうか。市民参加による博物館運営とは、これまでの博物館に欠けていた部分を、市民のボランティア活動を受け入れることによって強化し、相互理解を深め、さまざまな形で協働することによって、市民の生涯学習活動にとって不可欠の存在として、博物館を生かし続けることにつながるとともに、協働作業によって得た成果を市民に還元することになるのである。

ついで博物館の職員と市民スタッフの協働作業によって中長期的な構想と、それに基づく現実的な活動計画を立てることが、共通の目的の設定や課題認識にとって不可欠の作業である。そして、共通の土俵に立ったうえで、互いの役割と責任を明確にし、実際の活動を行っていくべきであろう。この点に関しては、2001年に財団法人日本博物館協会が、文部省の委嘱事業「博物館の望ましいあり方」調査研究委員会報告として出した『「対話と連携」の博物館—理解への対話・行動への連携【市民とともに創る新時代博物館】』が、これからの公立博物館運営の指針となるであろう。

現在の公立博物館は、「ダイヤモンドの原石」的な段階にあると思う。つまり、生涯学習社会と言われる今日において、大きな可能性を秘めているが、依然として解決していかなければならない課題がたくさんある、ということである。そのためにも博物館が市民と協働して、「多くの力」を「大きな力」に変えて、博物館を魅力ある活動の舞台としていただきたいと思う。

なお、私は本年4月の人事異動により、博物館の教育普及担当から市長部局の自治文化課市民文化担当に配置替えとなり、「市民参画による街づくり」という視点から市民活動を考える立場となったが、基本的な考え方は博物館在職時と同じである。本稿は、

私が入間市博物館ALIT（アリット）在職時に、同館の『入間市博物館紀要第2号』^{*2}に掲載した拙稿を要約したものである。本稿の執筆にあたっては、今では部外者となってしまった私に、多大なご理解をいただいた柳澤康雄館長をはじめとする、元同僚のご協力をいただいた。ここに心底より謝意を表するとともに、入間市博物館が「市民の心のよりどころ」となる博物館として存在し続けることを祈念している。

※1 現在、運営協力は、「入間市博物館茶の花会」という名称で活動している。

※2 拙稿「入間市博物館ALITの新たな試み～真の市民参加型博物館の実現をめざして～」／『入間市博物館紀要』第2号（2002年3月）

※3 入間市博物館の概要や活動については、ホームページを参照のこと。

<http://www.alit.city.iruma.saitama.jp/>

『岩手県におけるエコミュージアムの現状』

～構想を策定した釜石市、大槌町、
西和賀地域の三事例～

株式会社邑計画事務所

石崎 泰子・熊谷 智義

はじめに

1. 報告にあたって

現在、岩手県においては、エコミュージアムの実践活動として、釜石市、大槌町、西和賀地域（湯田町、沢内村）で、構想づくりを中心とした活動が進められている。

そこで本稿では、それぞれの活動と構想の概要を中心に、地域計画コンサルタントとして策定過程に関わった立場から、報告することを目的としている。^{注1)}



図1 三事例の位置図

2. 岩手におけるエコミュージアム

既に、岩手県内では、三陸町（大船渡市）や東和町^{注2)}において、エコミュージアムを推進する実践活動があり、また、二戸市^{注3)}や遠野市^{注4)}でも、同様の取り組みが展開されている。

また、最近では、岩手県が平成11年に策定した「岩手県総合計画」の中で、「岩手型全県エコミュージアム」を打ち出している。^{注5)}

3. 本稿の構成

釜石市をはじめとした、上記3つの地域におけるエコミュージアム構想の策定は、これらを背景としてすすめられているものであるが、それぞれの状況は異なっているので、構想の位置づけや経緯、計画概要について、報告したい。

また、最後に、実際の策定業務に関わった立場から、筆者らの感じているいくつかの課題を述べる。

I 釜石市におけるエコミュージアムの取組み

1. 釜石市の概要

釜石市は、岩手県の東南部にあり、陸中海岸国立公園のほぼ中央に位置している。

近代製鉄業発祥の地としての歴史を持ち、「鉄と魚と観光のまち」



写真1 JR釜石駅周辺（釜石市鈴子）

として発達してきた。現在は、東北横断自動車道釜石秋田線及び三陸縦貫自動車道の整備、湾口防波堤を擁する釜石港の整備が進み、近い将来には物流拠点としての機能向上が期待されている。

市内の歴史文化関連施設としては、釜石市立鉄の歴史館、釜石市郷土資料館、釜石鉱山資料館がある。

2. エコミュージアムの位置づけ

釜石市の第五次総合計画「スクラム釜石21プラン（平成12年6月議決）」においては、「鉄の歴史と環境を生かす地域づくり」を重点施策として位置づけた。この施策の具体化に向けて、歴史や地域資源を活用した地域づくりと、地域に誇りと愛情を持つ住民の活動に基づくエコミュージアムを推進するため、「釜石市エコミュージアム構想」^{注6)}が策定されている。

3. 釜石市における計画策定の経緯

計画策定にあたっては、始めに、筆者らが中心となり、既存資料や関連計画の整理と関係者へのヒアリング調査を実施し、今後のエコミュージアムに対する取り組みの意向や可能性など、現状の把握と課題の抽出を行った。

この調査結果に基づき、釜石市総務企画部企画課が事務局となり、庁内関係課及び市民委員、学識経験者等により構成される構想検討委員会を設置。エコミュージアムの基本的な考え方について、共通認識を深めながら、5回にわたり、釜石におけるエコミュージアムの基本理念や方針、具体的な展開方策について、検討を繰り返した。

また、別事業として同時期に実施された「産業遺産調査」の結果や、市北部の栗林・橋野地区における「地元学実践フィールドワーク」^{注7)}の結果についても内容を取り入れながら構想の検討を進めた。特に後者は、身近な地域資源の掘り起こしを行う活動であり、エコミュージアムの構築には欠かせない活動であった。

これらをふまえ、釜石におけるエコミュージアム構想は、平成13年3月に取りまとめられている。

4. 釜石市エコミュージアム構想の概要

構想の構成及び策定フローは、以下のとおりである。

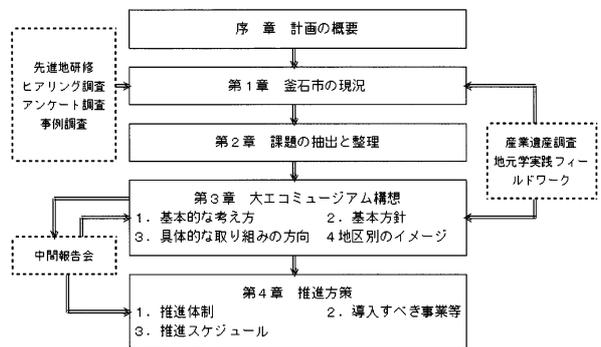


図2 構想の構成及び策定フロー

(1) 釜石エコミュージアムの基本的な考え方

構想の名称及びキーワード、そして構想策定の基本となる考え方は、次のとおりである。

① 名称

釜石市にとって「鉄」は地域イメージを象徴する重要な要素であり、海山川など「自然」に恵まれた釜石市を表すため、構想の名称を次のように設定した。

「鉄と自然の博物館かまいし」

～釜石学による地域づくり～

② キーワード

釜石市における地域資源について、次の6つに分類し、キーワードとして設定した。

「鉄」「海」「暮らし」「歴史」「自然」「産業」

③ 釜石学と博物館

名称の副題に用いた「釜石学」と「博物館」の関係については、「釜石学は郷土への誇りを醸成する住民主体の学習活動であり、地域を担う人づくりの活動である」と位置づけ、同時に「釜石学の実践活動を通して、地域の幅広い資源を掘り起こし、地域づくりを推進する」とした。また、そのために「釜石学推進のため、博物館機能の整備をめざす」とした。

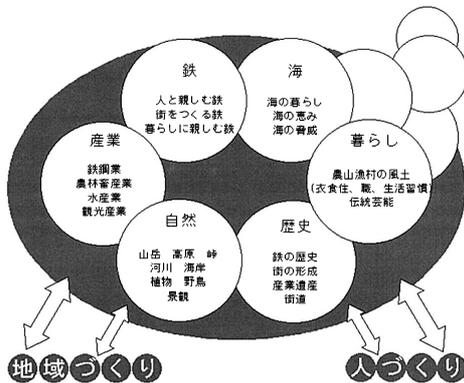


図3 構想のキーワード

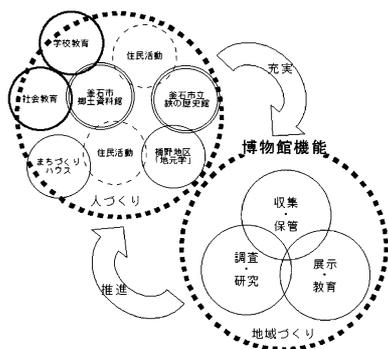


図4 釜石学と博物館の関係

④ 釜石学による地域活性化

産業面の活性化を意識し「釜石学の推進による住民活動や情報受発信の活発化、交流人口の増加による地域活性化をめざします」とした。

⑤ 釜石学による多様な人づくり

人づくりの側面にも触れ、「専門家やインストラクターの育成を目指すとともに、地域住民の地域づくりに対する意識高揚をはかります。また、子どもの視点に立った教育体制の整備をめざします。さらに、人的ネットワークの形成をはかります」とした。

(2) 釜石エコミュージアムの基本方針

推進にあたっての基本方針として、以下の3項目を掲げ、各方針の具体的な内容を、それぞれ次のようにまとめた。

① 地域の再認識と郷土への誇りの醸成

- ・釜石市全域におけるテーマ別地域資源調査活動の推進
- ・地区別の地域資源調査活動の推進
- ・サテライト整備の推進

② 博物館機能の整備充実

- ・推進拠点としての博物館機能整備の推進
- ・学習の場としての博物館機能整備の推進
- ・市民活動の育成と支援の推進

③ 地域資源を生かした地域活性化

- ・釜石学による地域づくり活動の情報発信
- ・地域資源を生かしたツーリズムの推進
- ・地域資源を生かした商品開発・特産品づくりの推進
- ・交流拠点としての中心市街地活性化の推進

(3) 具体的な取り組みの方向

釜石学による地域づくりを実践するにあたって、釜石市全域におけるテーマ別の活動と、釜石市を地区ごとに区分した地区別の活動の二本柱を中心とした資源の掘り起こし活動を推進するものとした。

(4) 推進体制

構想策定後の推進体制は、以下のとおりである。

- ・「鉄と自然の博物館かまいし(仮称)」推進協議会の設立により、行政、住民、企業、専門家(研究者、博物館学芸員など)の連携を図り、釜石学による地域づくりの推進をめざす。
- ・地域づくりを持続的に発展させていくため、上記の協議会と社会教育、学校教育、グリーンツーリズムなどの連携を図り、活動のネットワークづくりをめざす。
- ・連携の内容としては、各種活動の実施や施設の利用、人材育成、人材バンク作成、各種情報の共有、PR活動などを想定する。
- ・釜石市においては、庁内関係課各課の連携により、各種施策との関連づけを図りながら釜石学による地域づくりを推進する体制の整備をめざす。また、住民活動の支援や情報提供のほか、人材育成にも努める。

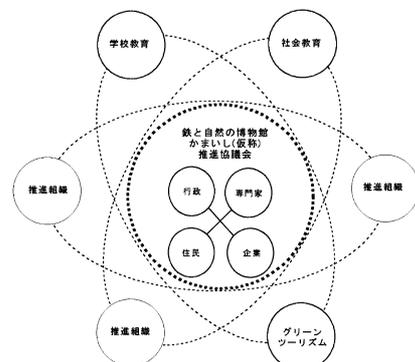


図5 推進体制イメージ

5. 計画策定後、現時点の状況

平成13年度には「鉄と自然の博物館推進委員会」が設立され、今後の活動等について議論が重ねられているほか、12年度の栗林・橋野地区地元学実践フィールドワークに続けて、市南部の唐丹地区においてフィールドワークが行われた。さらに、14年度は市中央部の甲子地区におけるフィールドワークの実施が検討されている。

II 大槌町におけるエコミュージアムの取組み

1. 大槌町の概要

大槌町は岩手県の東部に位置し、南側は釜石市に隣接している。

江戸時代初期までは、大槌氏がこの地を治め、その後も南部藩の代官所が設置されるなど、行政の中心地として繁栄してきた。

また、南部藩最大の豪商といわれた前川善兵衛の出身地でもある。

町の基幹産業である漁業は、獲る漁業から育てる漁業へ転換が進み、浜の人々に活力を与えてきた。



写真2 浪板海岸海水浴場（大槌町）

2. エコミュージアムの位置づけ

前述のとおり、岩手県は「岩手型全県エコミュージアム」の推進を掲げ、支援を進めている。釜石地方振興局所管区域（釜石市及び大槌町）では、平成12年度に、釜石市がエコミュージアム構想を策定していることから、広域での推進を図るため、「大槌町エコミュージアム構想」^{注8)}を策定したものである。

3. 大槌町における計画策定の経緯

筆者らは、釜石地方振興局、大槌町企画財政課によって構成された事務局に参加し、大槌町役場関係課と地域住民等により釜石大槌広域エコミュージアム推進事業調査委員会を組織、調査の実施及び構想の検討を進めた。

同委員会では、エコミュージアムについての認識を共有し、既存資料・データをもとに地域の特性と課題を抽出。事務局と委員、地元住民及び岩手大学の教官等により、地元学フィールドワークの手法で地域資源調査を行った。

これらの結果をふまえ、大槌町におけるエコミュージアムのあり方や広域におけるエコミュージアムの取組みについて、委員会で検討を重ねた。構想の枠組みがある程度定まった段階で、地域住民を交

えて意見交換会（中間報告会）を開催し、平成14年3月に最終的な取りまとめを行っている。

4. 大槌町エコミュージアム構想の概要

構想の構成及び策定フローは、以下のとおりである。

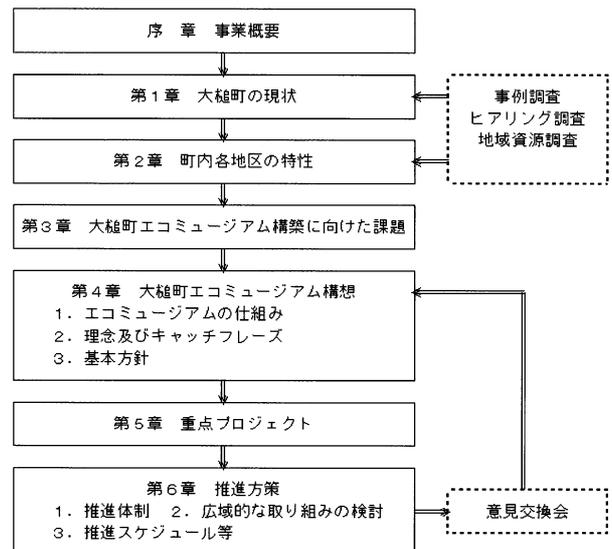


図6 構想の構成及び策定フロー

(1) 大槌町エコミュージアムの基本理念

委員会での議論をふまえ、「地域を見つめ、地域の良さを再発見する活動を通して、郷土への愛着と誇りの醸成をめざす」とともに、「地域の文化や歴史、各種地域資源を次の世代に引き継ぐと共に、それらの利活用による地域づくりを推進する」の2つを基本に掲げた。

(2) 大槌エコミュージアムのキャッチフレーズ

第7次大槌町町勢発展計画「ぬくもり大槌21」において、まちづくりのテーマが「自然・ひと・地域ー共に織りなす創造舞台」とされており、地域の資源を的確に表している3つのキーワードが示されていたことから、エコミュージアムのキャッチフレーズとして、次のように設定した。

「おうち『自然・ひと・地域』まるごと博物館」

(3) 大槌町エコミュージアムの基本方針

また、基本方針として次の2つの柱を設定した。

①大槌町への誇りの醸成

- ・地域の歴史や文化、地域資源、魅力等の再発見
- ・子ども達や次の世代へ伝えていくための記録づくり
- ・残すべきものの保全・保存、残っていないものの復元
- ・郷土を素材とした家庭、地域、学校での教育の推進

②地域資源を活かした地域づくり

- ・各種地域資源、未利用資源の利活用の検討
- ・地域資源を活用した体験、交流の推進
- ・拠点を活かした体験型・滞在型観光との連携
- ・大槌の各種資源やイベントに関する情報の受発信システムの構築

(4) 重点プロジェクト

基本方針から、今後重点的に取り組むべき活動を、「調査」「保全」「学習」「活用」の4つに分類した。さらに、「調査」活動は全ての活動の基本になることから、「保全」「学習」「活用」に重点をおいた活動として、次の8つのプロジェクトを設定した。

〔「保全」に重点をおいた活動〕

- ①環境保全（湧水の保全・淡水型イトヨの保全など）
- ②昔の暮らし研究（昔の記録づくりなど）

〔「学習」に重点をおいた活動〕

- ③人づくり（案内人養成・登録システムの構築など）
- ④歴史研究（歴史の道設定、歴史文化資源の公開など）
- ⑤学習拠点づくり（図書館の整備、東大海洋研究所との連携など）

〔「活用」に重点をおいた活動〕

- ⑥食文化（食材の掘り起こし、新規特産品の開発など）
- ⑦景観ポイント活用（新大槌八景体験観光など）
- ⑧水辺・里山まるごと体験（体験観光メニューの開発）

(5) 推進方策

構想の実現に向けた推進協議会の設置及び広域的な取り組みについては、以下のとおり、整理した。

①大槌町エコミュージアム推進協議会の設立

地域住民、民間、専門家、行政等が中心となって大槌町エコミュージアム推進協議会を設立する。協議会の機能は、エコミュージアムの構築と運営であり、活動の調整、調査を初めとするエコミュージアム構築に係る実践活動、情報収集・発信、調査研究、展示、教育普及、情報サービス等とする。

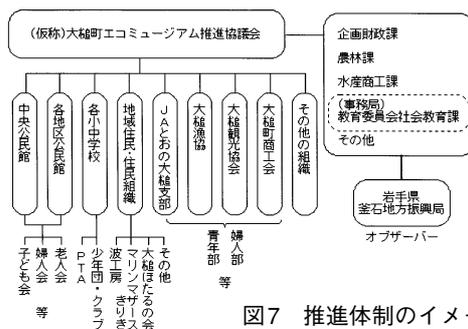


図7 推進体制のイメージ

②広域的な取り組みの検討

大槌町と釜石市は以前から交流が活発な地域であり、地理的条件や資源の属性等からエコミュージアムの構築に際しても、共通のテーマでの活動やノウハウの交流など、交流・連携の可能性があるといえる。

また、市町村を超えた地域間の連携・交流には、様々な効果が考えられることから、今後は、町内における活動の活発化や住民意識の高揚を図るとともに、釜石市を始めとする周辺市町村との連携・交流を視野に入れた取り組みを検討する。

5. 計画策定後、現時点の状況

委員会では、大槌町には、博物館および博物館相当施設がないため、将来的な博物館の整備も視野におくことが議論された。しかし、財政的に厳しい状況にあることから、当面、コア施設の候補として、

図書館もふくめて考えることとした。平成14年6月には、大槌町図書館が開館しており、今後の関係者の連携が期待されるところである。

また、重点プロジェクトの中でも取り上げた、「淡水型イトヨ」の調査研究が進められている。^{注9)}

Ⅲ 西和賀地域におけるエコミュージアムの取組み

1. 西和賀地域の概要

西和賀地域は、岩手県の西部に位置し、奥羽山脈の中にある県内有数の豪雪地帯である。そのため日本全国の山間地と同様、過疎化と高齢化が進んでいるが、周囲に豊かな自然が残っており、既に都市周辺では失われてしまった大切なものが、多く残されている。

地域の歴史文化施設には、碧祥寺博物館、湯田町歴史民俗資料館、雪国文化研究所などがある。



写真3 西和賀地域を流れる和賀川

2. エコミュージアムの位置づけ

湯田町と沢内村を合わせた西和賀地域では、自然環境や地域の歴史文化を対象とした住民活動が、これまでも活発になされてきている。そういった実践を背景に、西和賀地域でも、エコミュージアムの理念に基づく取り組みを住民が進めている。

西和賀地域では、I、IIで紹介した2事例とは異なり、民間の主体的な活動を行政が支援する形で、北上地方振興局の補助事業を導入し、「西和賀広域エコミュージアム構想」^{注10)}が策定されたものである。

3. 西和賀地域における構想策定の経緯

構想の検討に先立ち、湯田町企画調整課に事務局を置き、湯田町・沢内村の関係者（住民、民間、行政）による「西和賀広域エコミュージアム推進協議会」（以下、協議会）が設置されている。

協議会の下に地域資源の掘り起こし等を行う「西和賀地元学実践部会」（以下、地元学部会）、構想の具体的事業計画等を検討する「西和賀エコミュージアム構想策定委員会」（以下、委員会）を設置。地元学部会は、勉強会を含めて3回の地元学フィールドワークの実践を行った。

委員会では、参加者によるワークショップ（ポストイットを用いたブレイン・ライティングとKJ法による整理）を繰り返し、エコミュージアムのイメージをまとめる形で、具体的内容の議論を重ねた。それらの結果は、構想案として協議会に報告され、そ

の後、構想内容の調整を行い、最終的に平成14年3月に取りまとめられている。

4. 西和賀ミュージアム構想の概要

構想の構成及び策定フローは、次のとおりである。

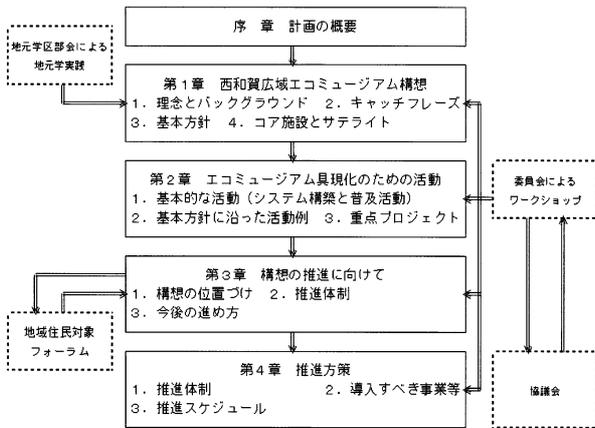


図8 構想の構成及び策定フロー

(1) キャッチフレーズ

西和賀には、「結い」の文化が残っている。西和賀の人々は、助け合い、厳しい自然環境の中で、雪や温泉などを活かし自然と共生して暮らしてきた。そこで、キャッチフレーズを次のように設定した。

「西和賀の人と自然と環境を守り育てる豊かな里づくり」

(2) 活動の基本方針

活動の柱となる5つの基本方針を、次のとおり設定した。

- ①西和賀「地元学」の推進
- ②自然環境の保全活動の推進
- ③文化の伝承活動の推進
- ④資源循環を基調とする地域社会の構築
- ⑤地域資源を活かした交流活動の推進

(3) コア施設とサテライト

コア施設の機能としては、事務局、調査研究、教育、情報受発信、たまり場などの機能を想定している。

また、サテライトは、「博物館資料」を現地において保存、保全、公開、展示する周辺施設として、地域内の様々な資源をリストアップした。



図9 西和賀エコミュージアムの概念図

(4) 基本的な活動

西和賀広域エコミュージアムの構築を目指すため、本構想では2つの基本的な活動として、エコミュージアムの「システム構築」と「普及活動」を設定した。

システム構築のための活動内容としては、コア施設の整備、サテライトの認定、サテライトの整備、ディスカバリートレイルの設定、西和賀ガイドの養成である。また、普及活動の内容は、住民向け説明会、広報誌の発行、普及パンフレットの作成、ホームページ等を活用した情報発信などである。

(5) 重点プロジェクト

上に示した「活動の柱となる5つの基本方針」に沿って、具体的に今後のあり方を示すものとして、「西和賀まるごと記録作り」や「雪国データベースの

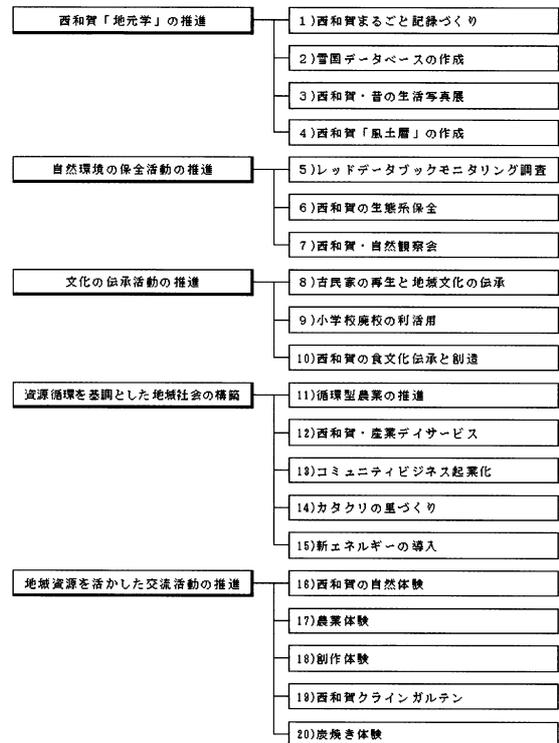


図10 重点プロジェクトの構成

作成」、「古民家の再生と地域文化の伝承」など、20の重点プロジェクトを設定した。

(6) 推進体制

構想の推進は、各種団体、関係組織、地域住民、行政等から構成される「西和賀広域エコミュージアム推進協議会」を推進母体とした。

また、協議会の役割については、構想に沿って西和賀広域エコミュージアムの構築・運営を積極的に推進するとともに、エコミュージアムに関係する西和賀地域の様々な組織や事業をコーディネートするものと位置づけた。

さらに、協議会の下に「エコミュージアム推進事業部会」を設置し、「地元学推進部会」とともに2つの部会として、位置づけなおした。

地元学推進部会では、今後も継続して地元学による地域資源調査を進める。エコミュージアム推進事業部会は、本構想の内容に沿って、事業を実施する

なお三陸町は、平成13年11月に大船渡市と合併、大船渡市三陸町となっている。

- 注3) 二戸市では、平成4年(1992)度から「楽しく美しいまちづくり」事業を進め、「二戸市の宝さがし」として、詳細な地域資源調査を実施。その結果をまちづくりの事業計画書としてとりまとめ、「宝」のマップや案内板の設置、インフォメーション機能を持つシビックセンターの整備、まちづくり推進課の設置などが進められている。調査結果は、文献[2]を参照。なお、この事業ではエコミュージアムという名称は用いられていないが、筆者らは、理念や活動面でエコミュージアムの事例と捉えている。
- 注4) 遠野市では、「トオノピアプラン」[3]に基づく、「博物館都市構想」の下で、市民センターや市立博物館が整備されてきた。その一つに「伝承館」があげられる。また、「遠野ふるさと村」が整備されてきた。これらは、エコミュージアムとは称していないが、構造的に類似のものとして捉える。また、グリーンツーリズム[4]の展開に伴い、エコミュージアムの構築が模索されている。
- 注5) 平成13(2001)年度から同22(2010)年を計画期間とする新しい「岩手県総合計画」[5]では、物語りのあるふるさとづくりプロジェクトを掲げている。その中で、「いわて地元学」の推進やグラウンドワーク活動の推進とともに、「岩手型全県エコミュージアム」の推進を、プロジェクトの1つとして打ち出し、岩手県内のエコミュージアム推進を支援する姿勢を明確にしている。具体的な事業として、「釜石市エコミュージアム構想策定に係る地元学による地域資源調査」(平成12年度：企画振興部企画調整課)や「釜石大槌広域エコミュージアム推進事業」(平成13年度：釜石地方振興局)、「西和賀エコミュージアム構想事業」(平成13年度：北上地方振興局)等を進めている。
- 注6) 平成12年度事業として、釜石市総務企画部企画課が事務局となり、構想策定委員会で検討し策定した。(文献[7])
- 注7) 吉本哲郎[6]、今井史両氏を迎え、釜石市北部の栗林・橋野地区において、地域資源調査を全3回(のべ6日間)実施した。
- 注8) 平成13年度事業で、釜石地方振興局及び大槌町企画財政課が事務局となり、構想策定委員会で策定した。(文献[8])
- 注9) 平成11年11月、総合研究大学院大学(神奈川県葉山町)の「生命系における循環と共生」共同研究会が大槌町で開催された際に、源水に生息するトゲウオ科のイトヨの視察が行われ、貴重な淡水型である可能性が高いことに議論が集中。その後の調査では、淡水型の生活環境を有すること等が明らかになっている。
- 注10) 平成13年度事業で、湯田町企画情報課が事務局となり、西和賀エコミュージアム構想策定委員会が策定した。(文献[9])
- 注11) 前掲の文献[6]参照。
- 注12) 前掲の文献[1]で、大山は「エコミュージアムは、地域の研究活動を継続し、人々に対して分かりやすく伝

ることで、知的探求心を喚起させ、新たな産業や雇用の創出を生み出すなど、地域振興をめざすものといえる」としている。

- 注13) 倉田[10]は、「エコミュージアムが博物館であると規定するならば、その博物館活動を支える学芸員を配置し、継続的な博物館活動を組織しなければならない」と指摘し、地域おこし的手段としてのエコミュージアムの安易な概念拡張を戒めている。
- 注14) 大槌町立図書館は、2002年6月に開館。鉄筋コンクリート二階建、延べ床面積は約418㎡。開館を記念し、愛媛県の男性から寄贈を受けた戦前の大槌の様子を伝える写真や文書を展示した。
- 注15) 地域博物館について、伊藤[11]は、「地域博物館という考えかたは、1960年代、地域で活動が続けてきた中小博物館の自己主張であった。国立、県立の大型館とは異なる中小館の現場における行動指針として、郷土博物館、地方博物館などの用語で表現されていた」とし、「1976年開館した平塚市博物館は、館のフィールドを「相模川流域の自然と文化」と条例に明記し、また『平塚市博物館年報』第1号(1977年)にて、郷土博物館などの用語では表象しきれない新しい意味を含むものとして“地域博物館”の用語を館の方針として提起した」と指摘している。なお、平塚市博物館の実践について、浜口は「放課後博物館」と位置づけ、文献[12]などで詳細に論じている。

【引用・参考文献】

- [1] 大山由美子(2000):「地域づくりとエコミュージアム～日本における活用手法と成果～」, JMMA会報, NO.16, vol.4, no.4, pp.5-9.
- [2] 二戸市(1995):『宝とともに生きる二戸のまちづくり～楽しく美しいまちづくり事業計画書～』
- [3] 千葉富三(1978):「トオノピアプランーその視点と原点」, 都市計画協会, 新都市, 1978.10.
- [4] 遠野地方振興局(1997):『遠野型ルーラルアムニティ推進構想調査研究事業報告書ー遠野型グリーンツーリズムへの取り組みー』
- [5] 岩手県(1999):『岩手県総合計画ーみんなで作る夢県土いわてー』
- [6] 吉本哲郎(2000):『風に聞け、土に聞けー風と土の地元学ー』, 地元学協会事務局
- [7] 釜石市(2001):『釜石市エコミュージアム構想 鉄と自然の博物館かまいしー釜石学による地域づくりー』
- [8] 釜石地方振興局(2002):『大槌町エコミュージアム構想ーおおつち「自然・ひと・地域」まるごと博物館ー』
- [9] 西和賀広域エコミュージアム推進協議会(2002):『西和賀広域エコミュージアム構想ー西和賀の人と自然と環境を守り育てる豊かな里づくりー』
- [10] 倉田公裕(1997):『新編博物館学』, 東京堂出版, p.29.
- [11] 伊藤寿郎(1990):「地域博物館の思考」, 歴史評論, No.483, 校倉書房, pp.2-19
- [12] 浜口哲一(2001):『放課後博物館へようこそ』, 地人書館

九州国立博物館（仮称）の誘致運動 と九州国立博物館設置促進財団の 活動について

財団法人九州国立博物館設置促進財団
前田 利輔

はじめに

九州国立博物館（仮称）は平成17年度開館予定で平成14年4月10日着工された。

百年來つづいた誘致運動の“夢の実現”である。その誘致運動の経過と「九州国立博物館設置促進財団」の活動状況について、JMMA事務局からご依頼を受けて、ここにご報告します。

報告の前に、これまで全国から約900社の企業・団体のみなさまと約7万5千人を超える人びとから貴重な募金のご協力を頂いたことにたいし、誌上をお借りして心から御礼申し上げます。



九州国立博物館完成予想図

国立博物館誘致運動の前身

九州における国立博物館の誘致運動は、明治32年に岡倉天心が福岡日日新聞（現西日本新聞）に「日本美術及び歴史的古物の散逸を防ぐとともに、保存・継承・発展に資するためには、九州（他の地方と異なる歴史を有する地＝外交の要所）に博物館を設置することは我々の責務である」と述べたことが原点といわれている。

森鷗外は明治33年に、アジアとの交流を示す数々の遺跡、史跡が存在する北部九州に、「古代博物館」を提唱している。

このように学術的、そしてその地域性からも九州に「国立博物館」の必要性が説かれたことは十分うなずける。岡倉天心や森鷗外の提唱を受けて、実に百年來の悲願が実った思いである。

明治政府は東京国立博物館（明治5年）、奈良国立博物館（明治28年）、京都国立博物館（明治30年）の3館を歴史的な由緒ある地域に設置している。

昭和初期には第52回帝国議会に九州出身代議士が

中心になって「九州国立博物館設置に関する建議」をおこなった記録がある。

戦中戦後を経て、昭和40年代に政府は明治百年事業として「歴史民族博物館」設置を提案した。福岡県、奈良県などが名乗りをあげ、誘致合戦が始まった。常々博物館誘致に熱心だった太宰府天満宮西高辻信貞先代宮司はいち早く（昭和46年）天満宮敷地の3分の1に相当する15万㎡を博物館用地として福岡県に寄贈した。これは誘致運動に強いインパクトを与えるものだった。

建設予定地は、この寄贈された敷地に福岡県の九州歴史資料館などの敷地に民地の買収を行い、敷地面積約17万㎡とし、自然環境に配慮した5万㎡造成、すでに博物館建設が始まっている。

地域一体の誘致運動はじまる

九州にアジアとの交流を示す史跡を研究する国立研究機構であり、九州の文化の核となる施設にしたいという思いで誘致運動は始まった。組織としてまず国立九州博物館設置期成会（瓦林 潔 会長：福岡県の官民で組織。現九州国立博物館誘致推進本部の前身）が結成されスタートした。

昭和63年4月、福岡県は九州国立博物館誘致促進対策班（現国立博物館対策室の前身）設置。6月、官民一体の九州国立博物館誘致推進本部（永倉三郎 本部長。現大野 茂 本部長。以下誘致推進本部という）設置。8月、九州国立博物館設置促進国会議員連盟（二階堂 進 会長。現九州国立博物館を支援する議員連盟 [山崎 拓 会長] の前身。以下国会議員連盟という）発足。〔参照：年表〕

このように誘致運動組織が次々と結成され陳情活動や誘致のためのシンポジウム、決起大会などが開催された。この運動の盛り上がり、この熱意を「形」で示すために、平成4年12月、九州山口経済連合会などが主体となり、民間人による「財団法人九州国立博物館設置促進財団」（川合辰雄理事長、現理事長大野 茂、以下財団）が発足し、「国立博物館建設用地の確保」と「運営支援」のために基金づくりを決議した。その後、平成12年度より「建設募金」（目標額25億円）活動を開始した。

厳しい経済環境の募金活動

財団の募金活動は平成5年度から始まった。この時点では「博物館設置」は決定していない。対象先は九州域内地場の企業・団体・個人である。

バブル経済の破綻により経済状況は日増しに悪化する厳しい環境の中で「夢とロマンをかきたてる九州国立博物館を実現しよう」という吉田清治募金活動推進本部長の音頭で九州各地を行脚する日々が続いた。その数600社をこえる。

呼びかけの熱意と博物館に対する期待を込めて、平成10年には20億円を突破したが、取り巻く経済情勢は極めて悪い。基金造成はもとより超低金利時代

になって、利息で支援するという想定を揺るがした。

そのころ文化庁は来年度予算（平成11年度）に九州国立博物館（仮称）の基本設計費を計上するにあたり、博物館の総床面積25000㎡のうち2500㎡（約25億円相当）を財団が寄附採納するという提案をしてきた。財団はこの提案を受け入れ、「建設募金」（募金額25億円。募金期間：平成12年度～平成14年度）を始めることになった。福岡国税局の「指定寄付の認定」を受け、事務局は地元大手企業から職員（5名）の出向派遣を要請して募金体制を強化、募金対象先を九州から全国の企業・団体に拡大した。

「運営支援募金」は九州地場の600に及ぶ企業や団体の寄附金と福岡県職員はじめ地方自治体、大手企業の社員による約4万人の個人募金を集約していたが、平成11年6月より、西日本新聞社が「みんなでつくろう九州国立博物館」キャンペーンを提唱、財団と連携して、個人募金のキャンペーンが開始された。現在、個人募金者は約7万5千人、募金額は約2億円を越え、支援募金総額は約22億円を突破した。

このキャンペーンは募金者の氏名が新聞紙上に発表されるため募金活動の広がり貢献している。

厳しい建設募金活動

財団は平成13年度建設用地を確保し、文化庁に寄附採納の手続きを終えた。

建設募金（建築費用：目標25億円）は平成14年8月末現在約16億円集計している。建設費が当初予想を下回り、募金目標額は24億余円となったが、年度内に約8億円を集約しなければならない。これは極めて厳しい数字だが、目標達成に向けて東奔西走中である。

新財団のめざす支援活動について

基本計画で財団は「博物館の運営・諸活動の支援を行なう」と明記されている。われわれは博物館の「設置促進」のために、誘致運動の総意を「形」で示そうという趣旨で創設された。したがって、本来運営そのものに関わる財団ではない。

しかし、現時点で7万5千人の個人と全国から約9百社の企業や団体から募金の協力を得ている。募金に託された方々の胸中を付度して、財団の支援内容がよく分かる、よく見える「形」で行いたい。これは新財団の運営支援の基本コンセプトである。

期待される望ましい博物館の具現化

九州国立博物館（仮称）設立準備専門家会議白石太郎主査（国立歴史民族博物館教授）は、九州国立博物館（仮称）は「行政と地域の人びとが共に創る新しい博物館」との認識の上で、次のように述べられている。

「九州国立博物館は長い設置運動のなかから、従来の国立博物館とはまったく発想を異にした設立形態が模索されてきた。すなわち、国と地元の福岡県、

さらに民間の募金による九州国立博物館設置促進財団の三者が共同で設置する方向が定まっていた。こうした形態は、それぞれ独立行政法人にふさわしいものかもしれない。むしろこの独立行政法人化を千載一遇のチャンスととらえ、国と地方公共団体、民間の財団の三者が共に設立する新しい形の博物館をめざすべきだろう。それぞれ、行政と地域の人びとが共に創る新しい開かれた博物館として、この運動が当初から求めてきたものにほかならない。」（「九州国立博物館を考える」朝日新聞夕刊：平成13年4月7日）「行政と地域の人びとが共に創る新しい開かれた博物館」は基本計画の「組織・運営」①項③項でその方向は示されている。〔参照：基本計画抜粋〕

日本博物館協会は平成12年末、文部省委嘱事業「望ましい博物館のあり方」（調査研究委員会）報告で「（博物館の機能の）その鍵となるものが博物館の公共的使命の増大であり、具体的には、生涯学習社会における学習支援の強化である。その推進方策として、博物館内における、また博物館外との“対話と連帯”が求められている。」（まえがき）という。

設立準備専門家会議はその「組織・運営」についても検討されると伺っているので、百年ぶりに設置される21世紀を象徴する博物館として開館準備が進められることを期待したい。同時にこれまで博物館の誘致から建設に関して民間財団として、具体的な支援策を模索している。

博物館と地域の人びとが連携して活動するボランティア活動は象徴的な事業である。すでにこのボランティアについて「九州国立博物館（仮称）を支援する会」（会長：有吉林之助）では、平成14年4月、福岡県ならびに太宰府市などに「ボランティア活動」の提言を行っている。支援する会ボランティア部会が国内外の博物館等を視察研修してまとめられたものである。

募金エピソード

博物館の開館後は「切符切り」でも協力したいと開館を楽しみにしておられた故椎崎宣也氏は、病床から全財産を博物館に寄贈することで、その思いを託された。

九州に事業所を開設している企業から「九州の人びとに、長い間お世話になっている」というスタンスで協力頂いた。日本企業の「メセナ」「地域貢献」という思想が定着していることに驚き、経済人同士の連帯感、信頼関係などが募金に大きく作用しているという印象も強く受けた。

個人募金には家族みんなで名前を連ねての募金や退職記念にご夫婦で寄附されるという例もある。また、故人の遺言だから博物館建設に役立ててほしいという遺族からの寄附が最近目立っている。

芸能界では、松田聖子、山本リンダ、水谷八重子、黒木瞳などの募金や10月には大宰府政庁跡で南こうせつ・海援隊・さだまさし・谷村新司などによる「都

府楼の歌人たち」コンサートが開催され、「建設資金募集キャンペーン」のご協力を頂くことになっている。九州1周ウォーキング大会（10月）や定期的に開催される国博チャリティーゴルフコンペは5回を数える。ダイエーホークスの選手約百名の募金を王監督から頂いた。企業や労働組合の周年事業で寄附をいただくことも多くなってきている。

このように各界各層からのご支援に感謝して、すべての募金者（社）は、館内に「顕彰」して頂く事になった。

募金活動は「建設募金」が最後の山場を迎え、「運営支援募金」は、新財団の任務と活動が明確になるまで継続される。今後とも皆さんのご支援ご協力をお願いいたします。

あとがき

九州の人たちが待望した“夢とロマン”が実現する。これまでご支援いただいたみなさんに心から感謝申し上げます、この喜びを共有したい。

白石教授が述べておられるとおり、新構想を取り入れ易い九州国立博物館（仮称）だから、「館運営」から「館経営」という新しい博物館の方針をどう具現化されるのか大いに期待している。

当財団は発展的に新財団となる。その任務と役割について検討を始めた。新財団の活動方針と具体的な支援内容については、九州国立博物館（仮称）の「運営・組織」方針を受けて、協議していく予定である。

参 照

1. [基本計画] (運営・組織) (抜すい)
 - ①国及び博物館が置かれる地域が連携・協力して一体的に運営する博物館とする。
 - ②展示室、調査研究、国際交流等の機能に応じた組織を設けるものとする。
 - ③運営の一体的かつ円滑な推進等のため、国、地元、有識者等により構成する機関を設け、運営に係る基本的事項について協議するものとする。
 - ④財団は、博物館の運営・諸活動の支援を行なう。
2. [年表] 九州国立博物館（仮称）誘致の経緯

| | |
|---------|---|
| 明治32年2月 | 岡倉天心 九州に国立博物館設置の必要性を説く |
| 昭和2年2月 | 地元からの要望を受け、第52回帝国議会で九州選出議員（山内範造議員[筑紫郡] 他3名）が九州国立博物館建設に関する建議案を提出 |
| 昭和43年3月 | 国立九州博物館設置期成会（瓦林 潔 会長：福岡県の官民で組織。現九州国立博物館誘致推進本部の前身）発足 |
| 昭和46年3月 | 太宰府天満宮（西高辻信貞宮司）が福岡県に博物館建設用地15万㎡を寄贈（後に福岡県が2万㎡を追加購入、現在17万㎡となっている） |

- | | |
|----------|---|
| 昭和55年4月 | 博物館等建設推進九州会議（瓦林 潔 会長。福岡県の経済界・有識者で構成。以下九州会議という）発足 |
| 昭和63年3月 | 九州会議が九州各県知事の了承を得、建設候補地として太宰府を提言 |
| 4月 | 福岡県に九州国立博物館誘致促進対策班（現国立博物館対策室の前身）設置 |
| 6月 | 九州国立博物館誘致推進本部（永倉 三郎 本部長。九州の官民で構成。事務局は福岡県。以下誘致推進本部という）設置 |
| 8月 | 九州国立博物館設置促進国会議員連盟（二階堂進会長。現九州国立博物館を支援する議員連盟[山崎 拓会長]の前身。以下国会議員連盟という）発足 |
| 平成2年11月 | 九州地方知事会が「九州国立博物館の早期設置」の政府要望を決議平成3年10月誘致推進本部、「国立アジア文明博物館基本構想」を発表 |
| 平成4年7月 | 国会議員連盟、九州地方知事会、九経連、九州商工会議所連合会、九州経済同友会が国立博物館の「九州の太宰府」への早期設置を決議 |
| 12月 | 九州国立博物館設置促進財団（川合 辰雄会長。九州の民間で構成。現会長大野 茂以下財団という）設立 |
| 平成5年12月 | 福岡県に国立博物館対策室設置 |
| 平成6年2月 | 財団、国立博物館運営支援のための募金を開始（福岡県内で開始。同年10月九州全域に拡大） |
| 平成8年3月 | 文化庁、国立博物館の建設候補地を「九州の太宰府」に決定 |
| 7月 | 財団、個人募金を開始 |
| 平成11年3月 | 財団、建設募金（博物館延べ床面積25,000㎡のうち2,500㎡を建設し国に寄附するための資金：25億円）の開始を決議。国、福岡県、財団の三者による九州国立博物館（仮称）の設置が決定 |
| 5月 | 福岡県、「アジア学術・文化交流センター（仮称：九州国立博物館関連施設）基本構想・計画」を策定 |
| 6月 | 文化庁と福岡県、九州国立博物館設立準備専門家会議を共同設置 |
| 平成12年1月 | 財団、建設募金活動の全国展開を開始 |
| 平成13年11月 | 文化庁へ建設用地の寄附採納手続き実施 |
| 平成14年4月 | 九州国立博物館（仮称）着工 |
- 3 九州国立博物館設置促進財団ホームページ
URL <http://www.kyukoku.or.jp/>

時 の 話 題

ミュージアムを核とした町づくりの話題や、ミュージアム関連新制度など、ミュージアム・マネジメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。

地域小規模資料館における 市民参加の展示

—地域社会が支えるミュージアムの一つのあり方—

株式会社乃村工藝社

文化環境カンパニー 齋藤 玲子

■はじめに—遠野市について

「遠野自然資料館」は岩手県遠野市の里山の中に、遠野の原風景である曲がり屋の集落を再現した「遠野ふるさと村」内に今春オープンしました。(写真1) この施設は地元の植物研究者である故・小水内長太郎氏の研究成果、同時に遠野の豊富な自然を実物資料・写真資料を中心に紹介し、さらにワークショップスペース、映像コーナーも併設し遠野の自然に対する知識を深める場を提供しています。

遠野は民俗学的に有名ですが、それを支える背景に早池峰山をはじめとする自然が存在し、またその自然に支えられた産業が豊かな場でもあります。レジャーを楽しむ為や研究の為に訪れ、そのまま遠野を気に入り移り住んでしまう方も多く、また日本だけでなく海外から移住した方もおり、それぞれ民俗学の研究や地元の伝統工芸を継承しています。自然資料館の学芸担当者の多くも他県から遠野に移り住んだ方々でした。



*写真1
前景 中央：遠野の鳥とけものたち—床面ステージには地上で生活する動物を、木々には鳥を中心に展示している。前面：遠野昆虫マップ。写真3参照。

■企画・設計・制作・運営と一貫して主導的な役割を果すプロデューサーとしての学芸員

「遠野自然資料館」は遠野市立博物館の分館として位置付けられ、企画から運営まで遠野市立博物館の学芸員が一貫して担当しています。基本設計から開館まで1年足らずの期間であり、当初遠野市立博物館が所持していた展示資料は動物剥製が殆どでした

が、学芸担当者が地域人脈を有効に活用し、写真家(写真2)、昆虫研究者(写真3)、染色家(写真4)、鉱物研究者(写真5)の方々から展示資料の寄贈を受けた結果、当初の予定以上の展示資料が展示されることになりました。

*写真2

壁面展示—すべて遠野在住の写真家の方々が撮影した遠野の風景・昆虫・鳥の写真。故小水内氏が作成した植物標本も同様に展示している。画面中央は遠野の風景を描画と昆虫標本で再現した積層グラフィック。テーブル下部は抽斗式ケース。



*写真3

遠野昆虫マップ—遠野の地図をコルクで作成し、その上に遠野在住の昆虫研究者から寄贈された昆虫を展示。この昆虫マップ以外にもドイツ箱16箱分の昆虫標本が寄贈された。



*写真4

遠野に移り住み染色家となった方から寄贈された草木染め標本。



*写真5

抽斗式ケース内部(計8点)—鉱物研究者から寄贈された岩石展示の例。この他にも岩石収集のための道具、植物標本作成に必要な道具等もあわせて紹介している。

また本来、歴史系を専門としている学芸員であるにも関わらず、自然資料館のための資料収集から標本などの展示資料製作、演示具の製作まで行い、企画から運営までを通して同じ学芸担当者が深く関わっていました。例えば鼠の剥製、蝶の標本、植物標本などの展示資料を製作し、また足りないキャプションベースは自らアクリルを切断して製作していました。(写真6)

このように学芸担当者は自ら率先し展示資料・演示具を作成し、企画プロデュース、人のコーディネートまでも行っています。展示資料は学芸担当者、また遠野に移り住んだ方が製作したもの、演示具は学芸担当者が自ら製作する、この姿勢があるから新たな展示資料が不足する事も演示具が不足する事も無く、地域に根ざした運営に繋がっていくのだと考えられます。



*写真6

自然観察のヒント（計10点）—アゲハを題材に、学芸担当者が昆虫採集し昆虫標本の作り方を紹介した例。この他にも鼠の標本、植物標本なども学芸担当者の手によって作成された。

■自然資料館のデザインについて

全体的には明るく自然光を取り入れた資料館にこそ考え、また設計時は展示資料の数も未定であったので、展示更新しやすいよう心がけました。木をモチーフとした造作は動物剥製が多数展示されていますが（写真1 中央）、それ自体を演示具とし、床部分のステージだけでなく木々のどこにでも展示できるよう、剥製が増えた場合も対応できるデザインとしました。展示資料の増減に対応できるデザインはその他にも共通しており、壁面は取り外し可能な写真の額で壁を埋め尽くし、写真は差し替え可能としています。写真が収集されないであろうと考えていたのですが、最終的には地元の写真家による所蔵写真の多数が提供されました。テーブル下部の抽斗もケースとなっており（写真5）これも展示資料不足の場合の対応を考えていましたが、市民の協力と参加により充実したものとなりました。

テーブル・抽斗式ケースをはじめ「遠野自然資料館」の什器はすべて地元の木を用い、地元で製作しています。前述の通り、林業が盛んな場所なので、多種の木材を使用し、さらに木の一つ一つにキャプションを付け、什器も展示資料としての扱いとしま

した。

■自立した資料館—地元を中心とした地域の小規模博物館のあり方

基本構想・企画から運営まで一貫して同じ学芸担当者が担当し、さらに演示具の作成も行っているため、展示資料が追加されても常に臨機応変に対応出来る、発展していく自立した資料館となっています。また地域の人々とのコラボレーションによる資料館としたことで、オープン後も地域に開かれた場として運営されていくと思われれます。これからの「遠野自然資料館」のことを考えると、オープン時は未完成の状態であったと思います。現に引渡しから三週間ほど後に訪れた時は既に展示資料が増えていました。

建築のプランも決まっていない時から開館までを見続け、この「遠野自然資料館」は今後益々担当学芸員の手が加わり、地元の方々からの寄贈資料が増え、更新され続けていく資料館になると容易に予測する事が出来ました。

ヨーロッパの科学系博物館をネットするECSITE—その目的と役割

Executive Director.
Walter Staveloz

【欧州ネットワークの始まり】

1969年、フランク・オープンハイマー氏がサンフランシスコでエクスポラトリウムを、また同年、トロントにオンタリオサイエンスセンターを創設したことがきっかけとなり、アメリカでは、体験を重視した科学技術センターの設立ラッシュが始まった。この時期の科学技術セクターは、来館者が実際に展示物に触れて、学ぶことができるように設計・制作された“体験型展示”を、共有展示していた。



Walter Staveloz氏

その後まもない1973年、アメリカで非常に数多くの新施設があつまり、ASTC (Association of Science-Technology Centers) が設立された。その約15年後、同じような運動が欧州でも始まった。1989年7月のECSITEディレクター会議（科学館・博物館など、各施設の館長や代表が参加する会議）の議事録には、次の記載も残されている—「欧州の施設は、流行にのった発見的な展示デザインを取り入れているアメリカの施設に勝るとも劣らない」。議事録ではさらに、「ASTCは欧州で体験型展示会を展開するにあたって、情報を入手したり、相互連絡・協力を得る為の非常に利用価値がある」と、位置付けている。

実際には、ASTCは展示デザインに限らず、欧州ネットワーク“ECSITE”の創設の源となっている。1989年1月9日、パリで開かれた科学技術館会議で、23の博物館が無記名でECSITEの設立に投票した。参加者は、施設が増えるにしたがって、欧州の博物館や科学館特定の要望や関心に合うような協力体を創設するべき時期にあることを、認識していたのである。

【これまでの活動】

2002年春、ECSITEが四半期毎に発行しているニュースレターは50号を数えるようになった。その中で私は、ECSITEの過去10年の活動及び成果を次のように振り返ってみた。「これまで、ECSITEはニュースレター、ウェブサイト、定期会合、ディレクタ

ーやスタッフ向けのセミナー等、情報提供サービスやネットワークツールを提供してきた。」「しかし、年月の経過とともに、ネットワークは、いろいろな課題やプロジェクトを取り入れながら、あらゆる分野の専門的な受容力を増強する努力をしてきた。最近では、定例会議のプログラムの中で、展示制作、教育ツール、マルチメディア関連製品、営業戦略など、特定の分野に携わるスタッフ向けの専門的な会議を構成している。ECSITEの最大の強みは、定期的な情報提供やネットワークサービスの提供に加えて、ネットワークのプロジェクトを管理することができることにある。つまり、数名の会員で構成されるECSITEのブリュッセルオフィスが、すべての会員一人一人の利益となるべくプロジェクトを率先しているということである。プロジェクト『生命のための化学』は、そのもっとも良い例であり、1997年にブリュッセルで開催された定例会議で始められて以来、広く取り上げられ、またニュースレターにも意見が寄せられている。



2000年ECSITE会議、イタリア・ナポリ

【今後の活動】

ECSITEでは、2年毎に、会員の中から新しい代表を選出している。現在の代表は、ジョン・デュラント教授（イギリスの“*At-Bristol*”科学館の最高責任者）である。今後の展望は、ECSITEのこれまでの成果を、全世界的なものに築き上げていくことである。彼は、「科学館部門はまだまだ成長を続けているため、この分野への資本および歳入投資は増加している。この部門への投資水準によって、必然的に資金の運用価値を監視することについて、至極当然の疑問がある」と断言する。続けて彼は次のように語る、「科学館への資金提供者は、投資した資金が効果的に利用されているという、明らかな証拠を探している。説得力のある回答をするためには、それぞれの科学館に対して、信頼できる活動指標を提示する必要がある。また同様に、各施設がそれぞれ独自の活動を評価できるような絶対的な基準や目標、また国際的な比較基準の設定が必要とされている。ECSITEは、そのような基準の設定や評価に寄与し

なければならず、またそれによって、私達の活動の質や有用性も証明されるのである。これは、ECSITEの最終目標が、欧州共同体（EU）で理解されるリサーチの繰り返しを反映していることを意味する。EUリサーチカウンシル（欧州共同体調査審議会）では、国家的な調査方針・政策の基準作りを行っている。ECSITEを通じて、会員はデータを取り寄せ、実施経験を学ぶことによって、欧州における現状とそれを向上させるための推奨事項を構築している。これらを基礎に、ECSITEは、ECSITE内外から寄せられる情報を収集し、その価値を見極め、普及させること、また同じ分野での活動を希望する施設のため、欧州での問合せ窓口となることを目的としている。今後5年から10年間で、この役割を強くしていくよう努力する。」

【ECSITE 2002年定例会議】

近年、ECSITEの定例会議は、科学館の年間活動予定の中でも主要なイベントとして認知されはじめている。2000年ナポリ（イタリア）および2001年ラウエア（ノルウェー）での定例会議は、ともに大きな成功を収め、質の高いシンポジウム、ワークショップ、また正式交流に欠くことのできない機会を提供した。

2002年の定例会議はロンドン（イギリス）で、大英自然史博物館および大英科学博物館の共同開催となる。全体テーマは『アイディアの共有、資質の向上、ネットワークの構築』であり、11月14日から16日まで開催される。

【日本の皆様へ】

近年、ECSITE定例会議は、世界中の科学館およびディスカバリーセンターの専門家の土壌となる、重要かつ有意義な会議として認知されてきている。今年ロンドンで開催する会議は、これまでの中で最大規模且つ最高のものとなることを期待している。優秀な科学者や科学に携わる人々と出会い、非常に重要な科学技術、自然史また環境の分野において議論することができ、通常では得ることのできない機会を提供することを目指す。ワークショップやセミナー主催に加え、最先端の研究を行っている科学者と交流会議や欧州最大都市の観光や喧騒を体験する機会もある。ECSITEのこれまでの定例会議の中でも、過去に例のないほどの規模となる今年のロンドンでの会議に、日本からの多くの参加者がいることを期待する。

（翻訳：三田武志・株式会社ココロ）

「ミュージアムグッズ人気コンテスト」 にみる企業ミュージアムのまなざし

特定非営利活動法人企業ミュージアムの協会
亀田 訓生

現今の停滞する経済情勢下にあつて、公共性が強く、しかも社会文化貢献非営利の思想で運営されるミュージアムの経営環境は、以前にも増して厳しい。この厳しさは、民間の企業ミュージアムにあつても同様に厳しい。ミュージアムマネジメントの視点から、出版や飲食・物品販売といった収益事業が、より活発に展開され、これらがミュージアム経営の財政的な支柱を形成する、といった経営感覚が切実に求められている。

しかし、ネットワークの形成が遅れているミュージアムの世界にあつて、これらの経営活動がどのような状況のもとで、どのような種類のものが、どのように流通しているのか、といったことに対しての情報は少ない。NPO法人「企業ミュージアムの協会」は、昨年「ミュージアムグッズ人気コンテストBEST10」を実施するとともに、それらのグッズ名を発表しており、今年度の「第2回企業ミュージアムグッズ人気コンテスト」の結果が、この5月に公表された。「時の話題」として、その概要を紹介する。

公募期間：2002年1月9日～2002年5月10日

応募点数：76点

入選点数：ベスト10賞 10点

奨励賞 3点

全国表彰式：2002年8月1日（於千里ライフサイエンスセンタービル20階）

ベスト10賞（賞状と賞牌と賞金各1万円）

(1) グッズ名 「つまようじ詰め合わせセット」

【特 色】

国内及び海外向けの5種類のつまようじがカラフルなパッケージに収まっている。長く保存でき、それぞれのようなようじが、個別に包装されているため、人にも分けることができる。セットは紙箱の上のようなようじを使う吉原美人画（歌麿作）でパッケージされている。紙箱は使用後は小物入れとして使えるように配慮されている。つまようじは、全国の80%のシェアを占める河内長野の地場産業である。

【販売価格】 1,000円

【博物館名】 つまようじ資料室

【企業名】 株式会社広栄社

(大阪府河内長野市上原町885)

(2) グッズ名 「ぶるぶるボンネットバス」

【特 色】

博物館の玄関横に展示されている「トヨタボンネットバス」をモデルとした、機械仕掛けの動くグッズ。後部に付いているリングを後ろに引き、平坦な場所に置き、リングを放すと前に動き出す。鼻先の突き出した懐かしいスタイルが大人に、また子どもにもそのユーモラスな姿が人気を呼んでいる。

【販売価格】 630円

【博物館名】 トヨタ博物館

【企業名】 トヨタ自動車株式会社

(愛知県愛知郡長久手町大字長袖湫字横道41)

(3) グッズ名 「レザー・ライカ型カメラキーホルダー」

【特 色】

昨秋「世界の名機ライカ」の特別展を開催し、その機会に売り出したレザー製キーホルダー。手作りの味と感触がよく、手頃な価格でもあり、当館における人気商品となった。

【販売価格】 940円

【博物館名】 日本カメラ博物館

【企業団体名】 財団法人日本カメラ財団

(東京都千代田区一番町25 JCⅡ一番町ビル)

(4) グッズ名 「オリジナル樽入りコーヒー」

【特 色】

世界最高として有名なブルーマウンテンコーヒーだけが樽入りで日本に輸入される。その樽は館内に展示されているが、その樽を形どったミニチュアの容器にコーヒーが入っている。樽はインテリアに利用でき、思い出につながる。

【販売価格】 850円

【博物館名】 UCC コーヒー博物館

【企業名】 上島珈琲株式会社

(兵庫県神戸市中央区港島中町6)

(5) グッズ名 「おでんち予報」

【特 色】

電池の残量がひとめでわかる便利品。電池の残量を計測し、予報するミニ計器。しゃれたネーミングとともに電池の無駄遣いを排除できる。単1～単5電池、ボタン電池、9V (006P) 電池が調べられ、各電池をプラスとマイナス位置の金具に接触させると、針が電池の晴れ・曇り・傘マークを指し示す。子ども達にも、たのしい小さなすぐれもの。

【販売価格】 250円

【博物館名】 TEPCO SONIC

【企業名】 東京電力、東電ピーアール株式会社
(埼玉県さいたま市桜木町1-7-5)

(6) グッズ名 「クロックバック」

【特 色】

当社製の紙袋に時計をつけインテリア製に富んでいる。袋の赤色と青色のどちらの正面にも時計を付けられるように、加工してあるので、好みや置く場所の雰囲気にあわせて使い分けられる。袋の素材は環境にやさしいケナフ。来館された若い2人の結婚引き出物にも利用された。

【販売価格】 800円

【博物館名】 包装資料館

【企業名】 ザ・パック株式会社

(大阪府東大阪市市東鴻池町1-5-39)

(7) グッズ名 「おんまく」

【特 色】

ボディータオル。天然繊維100%の素材で、しっかりした肌ざわりで、ごしごし派に好評。日本一のタオル産地今治市の熟練した職人が、おんまく心をこめて作ったタオル。綿75%・ジュート麻25%、サイズ約26×96cm。おんまくとは今治の方言で、おもいきり、力いっぱい、一生懸命のことを意味する。

【販売価格】 500円

【博物館名】 タオル美術館 ASAKURA

【企業名】 一広株式会社

(愛媛県越智郡朝倉村朝倉上甲2930)

(8) グッズ名 「平野著名商店双六」

【特 色】

全興寺が中心になって平野区の町おこしが近年盛んで「平野町ぐるみ博物館」運動がある。環壕都市『平野』は、堺に匹敵する商圏をもち自治都市としてさかえ、平野本通商店街を中心にその顧客は、近隣の各方面からも集まってくる状況であった。明治22年創業の小林新聞舗では、この運動に協賛し、「新聞やさん博物館」を設立、64年前自社でつくった平野著名商店双六をカラーで復刻(縦55cm横79.2cm)し、今春よりグッズとして発売した。平野商店街の面影がしのばれる貴重な作品。昭和12年元旦発刊の双六列挙36店中、今も3割近くが頑張っている。

【販売価格】 200円

【博物館名】 新聞屋さん博物館

【企業名】 株式会社小林新聞舗

(大阪市平野区流町1-4-1)

(9) グッズ名「煙草煎餅」

【特 色】

江戸時代にはじまった煙草耕作の秦野葉の葉形を型にした煎餅で秦野の亀本製造の神奈川県指定銘菓をこの館のグッズとして販売している。他所では、買えない。その素朴な形と厳選された材料と丹沢の名水で作られた伝統の味。その手頃な値段もあり、明治32年秦野煙草試験場開設と同時に続けられている懐旧の煎餅として好売れ行きが続いている。3大名葉といわれたのは、水府葉（茨城県）、国分葉（鹿児島県）、秦野葉である。

【販売価格】 530円

【博物館名】 たばこと塩の博物館

【企業名】 日本たばこ産業株式会社
(東京都渋谷区神南1-16-8)

(10) グッズ名「王様貯金箱」

【特 色】

平成10年に北海道工場ウイスキー貯蔵庫の2棟を改装し、小さかった竹鶴資料館を大きくし、「ウイスキー博物館」と充実した。貯金箱の樽の上ののっているモデルのひげのおじさんは、キング オブ ブレンダーと呼称し、創設者の竹鶴正孝で、館オリジナルグッズとして今年新発売された。種類は同型で5色（緑色、桃色、水色、紺色、茶色）あるが、緑色に人気がある。

【販売価格】 1,650円

【博物館名】 ニッカ・ウイスキー博物館

【企業名】 ニッカウイスキー株式会社
(北海道余市郡余市町黒川町7-6)

奨励賞 3点（賞状と賞碑）

(1) グッズ名「夢工房紙芝居館」

【特 色】

社長が描いた南画技法をとりいれたユニークでたのしい紙芝居画（多色）を10枚、絵葉書にも使える形にしている。戦後の風景やたこやき、ホルモン焼きには、館の展示との関係もあるが、ほのぼのとしたタッチであり読み合わせして子どもたちにも見せたい。意欲的な取り組み。

【販売価格】 300円

【博物館名】 夢工房“技術文化館”

【企業名】 山岡金属工業株式会社
(大阪府守口市東郷通2-7-30)

(2) グッズ名「琥珀の森」

【特 色】

博物館グッズが会社の新製品の先導役となるのだ

という明快なポリシーのもと琥珀の入浴用化粧品を開発。新緑の香り（25g3包）500円、冬樹の香り（25g3包）500円、紅葉の香り（25g3包）500円で構成。館の展開方向とも合致した商品であり、企業ミュージアムの経営のモデルとして成功が期待される。

【販売価格】 1,500円

【博物館名】 久慈琥珀博物館

【企業名】 久慈琥珀株式会社
(岩手県久慈市小久慈19-156-133)

(3) グッズ名「羊羹資料館案内」

【特 色】

企業ミュージアムの素晴らしい案内書である。しかも、同じ高級紙を用いて「肥前の菓子」（500円）も作成されている。小城羊羹の明治初年肥前の城下町小城で創製されてからの歴史や羊羹の味わいと種類をはじめ羊羹のあらゆる情報がもりこまれ、資料館の建築まで案内している。写真やイラストも適切で読みやすくみごとである。「肥前の菓子」とセットで買い求められるケースが多い。

【販売価格】 500円

【博物館名】 村岡総本舗・羊羹資料館

【企業名】 株式会社村岡総本舗
(佐賀県小城町861)



(受賞館13館17名の代表者と亀田理事長)

まんが文化とまんが館 「横山隆一記念まんが館」の開館

株式会社文化環境研究所

高橋 信裕

■「まんが文化」の隆盛と「まんがミュージアム」の開館ブーム

“まんが”が、同時代社会に生きる人々の生活や思想、さらには生き方にまで影響を与え、現代社会で存在意義を獲得しているという現象は、誰もが認めるところとなっている。それにともない“まんが”という言葉のもつ意味までもが多様性を帯び、表記のうえでも“まんが”、“マンガ”、“MANGA”、“漫画”、“萬画”など、それぞれ情報発信する側の意図するところによっての使い分け、書き分けがなされるまでになっている。石ノ森章太郎氏は、まんがが人間界の全ての事象を表現することの出来るメディアであるとして、「萬画」という造語を使ってきた。先年、宮城県の石巻市に設立された氏の記念館が「石ノ森章太郎記念萬画館」と命名されたのは、そういった背景からである。

わが国のまんが図書、雑誌の発行部数は、他の書籍の発行部数を遥かに超え、その数量は世界一である。その国々の文化のレベル度を測る目安の一つに書籍の発行部数があげられるが、日本のまんが文化は、グローバル化の進展する今日、国境を越えてアジアやヨーロッパ諸国、アメリカなどにも波及し、日本文化の海外進出という側面を現出している。最近のニュースでも『少年ジャンプ』と『コミックパンチ』がこの秋、アメリカで翻訳出版されるということが報じられたが、そのアメリカまんがの雑誌の発行部数や読者は、日本の十分の一に満たない。

まんがは、出版社やテレビアニメ会社、商品開発企業などがビジネスとして取り込み、商業ベースで積極的に経済活動を展開しているが、このまんがの人気を「町おこし」に活用し、地域の活性化につなげようとする試みが、近年地方の自治体で盛んに行われつつある。その展開の一つが、まんがやまんが家をテーマとした「まんがミュージアム」の設立である。事実、まんがミュージアムは、全国各地に誕生しており、今後もこのブームは続いていくものと予想される。

■“横山隆一記念まんが館”は「美術館」であり「文学館」

まんがの特性は、直感と視覚に強く訴えるところにある。アニメーションは、そのまんがに動き

と音とを加え、テレビなどの放送メディアと連動することによって、まんがの可能性やニーズをさらに高めている。まんがへの社会的関心の高さは、出版界を席卷するとともに、放送メディアはもとより家庭用ゲームソフトにまで伸展し、今や日常の生活を楽しむに欠かせない必需品にまでなっている。現代を生きる同時代人に大きな影響をもたらす“まんが”が、集客装置である文化施設や地域の活性化につながる町おこしの有効な資源に活用されようとするのは、ごく自然の成り行きであり、既成の文化施設にあっては、まず「美術館」が強い関心をもった。1988年11月に開館した「川崎市市民ミュージアム」は、美術館としての性格の強い施設であるが、その資料の収集及び調査、研究、さらには展示対象のなかに“まんが”を取り込んだことでも話題となった。現在では、全国各地の美術館で“まんが”をテーマとした企画展や特別展が開催されることが一般化してきており、そこでは、現在のまんが文化とともに過去のまんが文化の掘り起しまで行われ、まんが文化の基層形成に「美術館」が大きく貢献している状況が展開している。また、まんが家は、出版文化との関わりの中で、早くからジャーナリズムとの結びつきをもってきており、その生成発展の段階で、社会風刺漫画や政治漫画、新聞漫画へと活動の舞台を広げてきた。こうした背景もあって“まんが”の揺籃期を形成したまんが家は、文士としての一面をも色濃くあわせもち、なかでも「横山隆一」は、そうしたまんが家の代表的な一人であった。したがって、「横山隆一記念まんが館」は、まんが家としての横山隆一氏の業績をベースとしつつも、芸術家としての感性、文士としてのエスプリが漂う展示が求められた。

鎌倉に居住し、鎌倉文士との交遊機会が多く、鎌倉市の「名誉市民」であった。と同時に、氏はその出身地である高知市の「名誉市民」でもあり、この縁から高知市が氏の記念館を熱望し、設立に漕ぎつけたのである。

■まんが家の「生きた時代の『流行』」と「暮らした空間の『不易』」が紡ぎあげた“横山隆一記念まんが館”の展示

横山隆一氏は、新聞連載漫画の「フクちゃん」で知られるまんが家である。手塚治虫氏にも先輩として崇敬され、本まんが館には手塚氏手作りになる「フクちゃん」冊子が寄贈、展示されてある。その表紙には「手塚治虫はさる昔、これを何十回も模写したのです。ススメフクちゃんを、ソラで書けるようになるまでになりました。横山先生ありがとうございます。」と手書きされている。一方、横山隆一には、彼の生い立ちや人生観を披瀝した「わが遊戯的人生」という著書がある。この著書に著されたように、彼の人生に一貫する思想は「遊戯的」

という「雅趣」にあった。展示にあたっては、この「雅趣」をどのように演出し現実化するかに多くのエネルギーが費やされた。この「雅趣」は、当然のことながら、ギラギラと脂ぎったものではなかったし、かといってことさらストイックなものでもなかった。一連のフクちゃん作品は、この雅趣のなかで生まれ育った代表作として、表現していく方法をとった。

氏の「遊戯的」生い立ちや人となり、そしてなによりもその独自のユーモア、ナンセンス感覚が時流とともに共鳴し、さまざまなキャラクターと漫画作品を世に送り出した訳だが、氏の生涯を貫いた「雅趣」が「ユーモアとナンセンス」に基づくものという理解から、本館のシンボルとして、「魚魚（ギョギョ）タワー」が発案された。

計画時点では、横山隆一氏自身が健在（オープン5ヶ月前の2001年11月死去、オープンは2002年4月）であり、このタワーは新たな創作作品として、取り入れられた。約400～500点の魚のキャラクターが描きおこされ、3層にわたる展示室を縦に貫くオブジェとして、吹き抜けスペースに配置された。天井部から吊り下げられた総高約9メートルの魚群のキャラクターは、正時とともにテーマ音楽が流れ、光の演出にあわせて回転し、記念館全体のシンボルとしての役割を果たしている。音楽は、「ガンダーラ」をはじめ「銀河鉄道999」などの作曲やグループ・ゴダイゴのボーカルとしても著名なタケカワユキヒデ氏が担当した。横山隆一氏が生前アニメ映画に携わった作品のなかで、擬音や効果音の音に対する感覚がユニークに映じたことから、作曲の過程でこうしたマンガチックな音が採用されているのも特色である。

3層に分けられた展示室の1層目は、高知のまんが家の紹介である。「まんが王国・土佐」と言われるように高知からは、多くのまんが家が誕生している。やなせたかし氏、はらたいら氏、黒鉄ヒロシ氏、コジロー氏、青柳裕介氏と枚挙にいとまがない。まんがを生み育てた土佐の風土がまんが家自身の口から語られ、そしてこれらのまんがキャラクターが来館者を迎える。

2層目では、横山隆一氏の生い立ちから晩年までの生涯が展開されている。横山隆一氏の創作活動の全容が、氏の作品世界を通してわかるように構成された「隆一ギャラリー」、また昭和の初年に横山氏等を中心に新進のまんが家達によって結成された「新漫画派集団（後の漫画集団）」の歴史は、近代日本のまんが史を紐解く上で重要なエポックを提供している。また、昭和の戦前から、戦後の長きを通じて新聞紙上に連載された「フクちゃん」をテーマとした「フクちゃん通り」の家庭的な界隈の演出は、フクちゃんとの触れ合いが身近に感じられるよう配慮され、またデジャブ的な効果をも意図した構成となっている。新聞連載の

終わりが近づく時期に各界の著名人から寄せられたまんがや文章を紹介するコーナーは「永遠の少年フクちゃん」として構成されているが、そのコーナー名称は、作家で現都知事の石原慎太郎氏から寄せられた「さよなら、永遠の少年フクちゃん。君はいつまでも、僕らの胸に生き続ける。さようなら。」から採られている。石原氏は、このまんが館のオープニングセレモニーに駆けつけ、記念シンポジウムでもパネリストとして参加している。「上野の都美術館をまんが館にする」という発言は、会場のまんがファンを喜ばせた。わが国のアニメ草創期に、横山隆一氏が多くのアニメ作品を世に出したことを知る人は少ない。その作品の一端に触れることのできる「アニメーションへの挑戦 おとぎプロ」は、今日隆盛の一途をたどるアニメの原点を伺うことの出来る貴重な資料と逸話を提供してくれる。

さらに、こうした創作活動を可能にした精神的な基盤が、横山隆一氏第2の故郷である鎌倉の生活現場にあるとして、「わが遊戯的世界」が再現された。その世界は、まんがや油絵などの作品を生み出した「アトリエ」であったり、友人知己との交遊の場として蔵をバーに改装した「グラ」であったり、恒例の花見会の席として小宴を張った「東屋」であったり、氏の生涯を通じての趣味、「鉄道模型」であったり、また各界の著名人とのコラボレーションによる一連の蒐集品「珍コレクション」であったりした。「珍コレクション」には、鎌倉文士を代表する川端康成の『胆石』など800点を超える、もう一つのまんが世界が収蔵されている。

3層目は、企画展示室である。数え切れないほどの多くのモノが、無償で寄贈されており、これらの資料が整理され、調査研究の過程を経て展示企画され、新たな脚光を浴びることになる。

■「フランス国立漫画映像センター」との国際的な連携

「横山隆一記念まんが館」は、わが国のまんが文化を代表する中核的な存在であり、その志や業績を国の内外に伝え、ともにまんが文化の向上と発展に貢献していこう、との考えから、まんがのジャンルのなかでも「カーズーン」（一コマ漫画）の伝統があり、かつ先進国であるフランスとの関係を重視し、「フランス国立漫画映像センター」との姉妹関係を樹立している。2002年4月のオープン時にも同センターの館長や学芸員が出席し、記念講演等も行われている。また、オープンに先立つ2ヶ月前には、本学会の特別事業で来日されていたフランス文化省博物館局のイザベル・バルザモ監理官も現地を訪れ、展示現場を視察し市長や館長とも親しく意見交換を行うなど、友好関係の基盤づくりに学会も重要な役割を果たした。

支部会だより

東北支部第2回大会の開催

東北支部長 兼松 重任

日本ミュージアム・マネジメント学会（JMMA）第2回東北支部総会並びに大会は平成14年6月8日に仙台市戦災復興記念館で行われた。平成12年の支部設立当時の熱気はなかったが、昨年は支部大会を実施できなかったのに比べると、出席者数は10名程度で予想を下回ったけれども支部大会を実施にこぎつけて、将来への展望を開くことが出来たように思われる。

午前中に幹事会を開き、総会のための議題の整理と今後の活動方針について討議した。午後には、まず「世界の博物館事情」についてJMMA副会長 斎藤 温次郎氏から特別講演が行われた。英、米、独、仏の各国の博物館運営等について述べた。英国では国立でも補助金は全運営経費の70—80%程度であるためレストラン、寄付など自助努力でやっていること、フランスの博物館では教育を重点におき、3歳からの教育を大切にしていること、ドイツはかたい国で技術史などが優れていることなどが指摘された。欧米と比較して日本の課題は博物館のための寄付を許さない体質の改善であることを指摘した。公立博物館でももう少し民間の手法をとる必要があることが主張された。その後行われた討論は有意義であった。

総会に引き続き、講演は（1）「総合学習の時間と博物館・学校の連携」が岩手県立博物館（岩手県博）学芸部長の高橋信雄氏によって行われた。岩手県博ではこの博物館・学校の連携について県内の小中高校、教育委員会などから教員を招き、首都圏をふくむ博物館を調査して博物館利用の懇談会で報告し、総合学習の時間にどのような取り組みをしているか、そのための博物館の利用はどうしているのかを聞いた。懇談会は3回行われた。しかし、まだ始まったばかりで、学校の思っていることと博物館の考え方が違うことがうき彫りになった。学校側の希望する利用形態としては40—50%が出前授業及び出前展示で、資料借受け希望が少なかった。利用したい博物館資料は、化石、昔の道具、歴史、生活とくらし、土器などが多く、鉱物、石器、昆虫、環境、宇宙などは少なかった。42.5%は先生と生徒が博物館へ一緒にきていない。一緒にきた場合でも先生は生徒を連れてきて座るだけで、予備調査・打合せなどを先生が少ない。先生は博物館にどんな土器があるか、また学芸員がいることも知らない。小中高生は入館料無料だが、そのことも知らない。このような問題点が明らかになった。岩手県博では平成13年度

には毎月5—6回の総合学習等の対応を行っている。テーマは藤原三代、岩手の歴史・岩手の自然、生物の絶滅、エジプト、藪川周辺の自然と生物、火おこしと石器づくり等であった。そのほか平成14年度には毎週日曜日に20名程度で体験教室を行っている。プログラムは、こはくの玉づくり、ろうそくづくり、風ぐるま、土偶づくり、そめもの、竹トンボ、せけん作り等を1時間半にわたって体験学習している。問題点は、学芸員の研究時間が少なくなることであった。

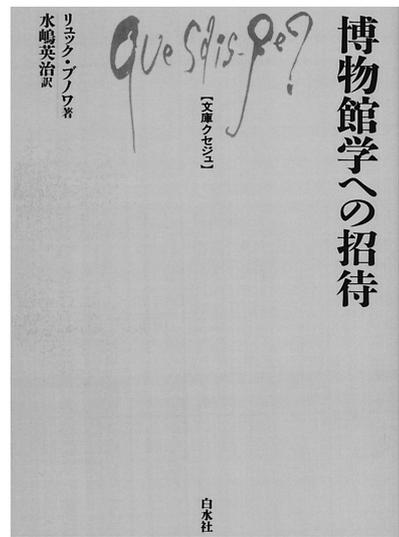
講演の（2）は新田秀樹宮城教育大学教授による「地方美術館はどう生き延びるか—石神の丘美術館のリニューアル計画をモデルとして」であった。この講演を補足説明したのは実際に担当した岩手町教育委員会社会教育課の佐々木光司文化係長であった。建設費16億円、作品40点で、開館はバブル景気が下がった1973年であった。岩手町の人口17,000人に対し、入館者数は当初年32万人の見込みであったが、2年目には3万人台、1999年度には1万2,000人台にまで下がった。1999年度の運営費は8,500万円に対して収入は630万円であった。2001年に新運営計画をたて、消極策でなく積極策をとることにした。その方法は、①多角化、複合化で工房、ギャラリー、産直施設、農産物実演販売加工施設、レストランなどを道の駅「石神の丘」と機能的にむすび、会社委託をやめ第三セクターへの業務委託をすることにした。②文化・社会教育施設へ原点回帰し、採算性とは別の尺度をとり本来的な美術館運営へ移行する。管轄は企画調整課から教育委員会へ移し、芸術監督・学芸員、企画委員会、友の会を置くことにした。作品は24点に減らす、意欲的な展示にして、リニューアルオープン後の平成14年7月をむかえる。リニューアル後の観客は29,400人を想定している。どう生き延びるかについて、特別展の充実、学校との連携、メディア戦略、地域連携につとめる。

次の研究会は10、11月に新田先生による地域ミュージアムの連携による全東北インターミュージアム・ナビの発表を予定しているので、他の部会との共催が望ましいと思われる。東京から高橋信裕事務局長が参加されたことを感謝したい。今回支部大会の準備等については後藤紳一郎幹事長代理にお世話をかけた。終了後には参加者一同はビールで乾杯して、第2回支部大会の成立を祝った。

新刊紹介

『博物館学への招待』

博物館学への招待



リユック・ブノフ著

水嶋英治 翻訳

発行・白水社

本体価格・951円十税

ISBN 4-560-05849

現在、わが国では「博物館」の定義、見直しが盛んに行われつつある。その議論の過程において、当然のこととしてコレクションの存在とその位置づけが俎上に上がる。ところが、わが国の博物館界では近年、コレクションの存在が「博物館」を規定する基準とは、必ずしもなり得ない、という考え方が根付きつつある。博物館における自由な学びは、従来の伝統的な博物館資料に依存しなくても可能であるし、資料から読み取り、取出した情報を介在させ、活用することで学習効果を上げることができる、という教育普及活動にシフトを移す今日の博物館のあり方を見れば、コレクションの実在は、高度に発達した情報社会にあつては、なお更のこと、博物館の存在意義を証明する必須の条件とはならない、ということであろう。このことは同時

に、博物館に収蔵されている資料の価値、位置づけそのものあり方もまた、問い直され、揺れ動くという現状を示すものでもある。

こうした時期に、水嶋英治氏による「博物館学への招待」が翻訳出版された。原書名は「博物館と博物館学」のタイトルでフランス人リュック・ブノフによって著され、1971年に出版されたものである。リユック・ブノフ氏については、この書の「はじめに」によれば「ルーヴル美術館の彫刻部をかきわきにヴェルサイユ宮殿という歴史博物館に移り、つづいてフランスで最も古い絵画館のひとつであるナント市美術館とデュック美術館へ、そして最後はブルターニュ地方の装飾芸術現代美術館で仕事をしてきた」学芸畑の生粋の博物館人である。

コレクションの存在を博物館なるもののアイデンティティの一つとする思想に貫かれたフランスの博物館人によるこの書は、「コレクションあつての博物館である」という博物館の、社会における役割や機能を伝統的な視点から押えたものであり、博物館を知ろうとする一般の人々には、この上ないいいテキストとなっている。また、博物館に携わる産官学に籍を置く関係者らにとつても、改めて「博物館なるもの」に邂逅することで、一種の癒しに似た落ち着きを取り戻す事の出来る書でもある。懐かしいこの肌触りには、わが国の博物館学の父とも称せられる柵橋源太郎の著書に接するときの感触に似たものがある。読者は試みに柵橋源太郎著「博物館学綱要」(昭和25年発行/理想社刊)を紐解くといひ。当時の欧米における博物館事情が、生き生きと描かれており、水嶋氏が柵橋氏の眼差しのもとに、博物館とのかかわりを深め、強めていこうとする姿勢を読み取ることが出来るよう。

「博物館学への招待」は、8章の章立てから構成されている。すなわち第1章「コレクションの精神」、第2章「コレクションから博物館へ」、第3章「博物館の建築」、第4章「博物館資料の展示」、第5章「博物館資料の研究」、第6章「博物館資料の保存」、第7章「資料の一般大衆」、第8章「博物館の形態」である。

この章立ての内容からも、博物館にとつて資料の存在が最も重視されるものであり、すべての活動の基盤を資料が担っていることが伺える。それゆえ、本書を貫く主張は、時代の関心事や新時代の潮流を意識させるものではないものになっているが、訳者のねらいはその伝統的博物館像の再生と招来である。ただ、訳者の経歴を知るとき、読者はある感慨に遭遇することになる。訳者である水嶋英治氏は東京・竹橋の科学技術館に長年勤務されている学芸員である。科学技術館の学芸員といえば、バーチャルミュージアムやデジタルミュージアムなどの現代科学の最先端をゆく技術動向に関心をもち、展開する持論も時流を意識したものには違いないとの先入観にとらわれるものだが、氏の場合は大きく異なっている点に興味深い。氏は本学会の会員で、学会活動にも積極的に関与され、そうした研修会や議論の場での発言も多く、参加者はその場で直接、氏の博物館への熱い想いに触れたことも多いのではなからうか。そこでの氏の発言は、本書が説く内容と同様に博物館本来の役割や機能についての学識が展開され、参加者を啓発し魅了することが多い。

(文責 文化環境研究所 高橋 信裕)

i n f o r m a t i o n

◆理事会のご報告◆

去る5月18日(土)、平成14年度第1回の理事会が開かれて、総会の席上で指摘要望のあった事項をはじめ、本会会務の運営体制整備についての改善案その他が審議決定されました。以下にご報告致します。

1. 総会関係事項

- (1) 総会議事運営は、先般改正のあった会則の条項に則って執り行い、会長が議長職に当たることが明らかにされ、今後これによることが確認された。
- (2) 決算報告書に関しては、計算の期間および方法に改善を求める指摘があったが、これは従来からの懸案であったので、この機会に本会独自の計算方法を廃止し期間収支と資産・負債をも記録する標準的な会計処理の方法に改めることとし、総会において財務の実態を報告できるようにする。

2. 会務の体制整備と役員の担当事項

会則改正により理事の定数が拡大されたが、このために理事の職務の所在が拡散しないように、理事会の機動的運営と担当理事への権限委譲の発揮を配慮する会務体制の整備を図ることにした。

- (1) 公式の理事会のほかに担当理事や研究部会長で構成する機動的な運営会議において、年度計画等で確定している会務執行上の事案を適時に協議し、推進できるようにする。
- (2) 現行の担当理事に加えて、新たに会務の重点事項を担当する理事を指名して、これらの事項を推進して行くこととする。現行と新設の担当事項並びに委任する理事の方々は次のとおりとなった。

| | | | | | |
|------|------|---------|------|--------|---------|
| (現行) | 大会関係 | 沖吉理事 | (新設) | 総務 | 斎藤副会長 |
| | 学会賞 | 大堀会長 | | 会員サービス | 倉本、高安理事 |
| | 紀要編集 | 堀副会長 | | ホームページ | 榊井理事 |
| | 会報編集 | 高橋(信)理事 | | 研究部会 | 堀副会長 |
| | 年報編集 | 里見理事 | | 学術会議 | 沖吉理事 |
| | 支部活動 | 諸岡副会長 | | 特別事業 | 川津理事 |

3. 将来構想検討委員会の設置について

本会は創立以来7年を経過し、これまでの実績をもとにして新たな展開を遂げるべき時期にある。また、本会活動の対象であるミュージアムは、社会からマネージメントの視点にたつた変革を求められている。さらに本会が日本学術会議の研究団体として社会的認知を受けると一層の社会的責務を果たすことが課題となってくる。このような状況を踏まえて本会の将来のあり方や構想を検討する専門委員会を設けることになった。概要は以下のとおり。

| | |
|--------|--|
| 名称 | 将来構想検討委員会 |
| 趣旨 | 本会の一層の発展を期するため将来構想を策定し、会長に諮問する。 |
| 設置期間 | 平成14・15年度内 |
| 構成 | 会長の指名する本会の役員・会員10名程度で構成し、必要により会員並びに会員以外の学識経験者の意見を求める。会長の指名により座長、その他の職をおく。 |
| 検討事項 | <ul style="list-style-type: none"> ・本会活動の成果の点検評価 ・最近の周辺情勢変化の分析 ・今後、本会が果たすべき役割、責務 ・活動基盤の整備等の課題 ・中期的な目標・活動計画案 ・その他、本会の将来構想に関すること |
| スケジュール | <ul style="list-style-type: none"> ・平成15年度までに報告書をまとめ、会長に諮問する。 ・必要に応じ、成果を理事会に報告し、本会事業に反映する。 |

u o i t e w j o j u !

4. 平成14年度の特別事業の実施

13年度に実施とした「総合的学習の時間に関するフォーラム」に相当する特別事業を今年度においても、文化環境研究所と共催することが承認された。12月初旬東京において、実施の予定である。

5. 日本学術会議・学術研究団体登録申請（報告）

本会は5月1日、かねて懸案であった学術団体登録の申請を同会議事務局あてに提出した。審査の結果は今秋に通知がある予定である。

◆日本学術会議に学術研究団体として登録されました◆

第19期日本学術会議会員の選出に関わる学術研究団体の登録申請をしておりましたが、審査の結果、本学会が日本学術会議学術研究団体として登録されることになりましたことをここにご報告いたします。

◆会費納入のお願い◆

会費未納の方はお早めに納入下さいますようお願いいたします。請求書・領収証等が必要な方は、事務局までご連絡下さい。また、個人会員の方で、会社名にてお振り込みいただきます場合は、通信欄にその旨ご記入いただくか、事務局までご一報下さいますようお願い申し上げます。

新規入会者のご紹介

(平成14年 6月16日～平成14年 8月15日現在)

【個人会員】

| | |
|---------|------------|
| 浅井 俊子 様 | 株式会社情報工房 |
| 石川 明夫 様 | 株式会社丹青社 |
| 市川 長弘 様 | 株式会社乃村工藝社 |
| 緒方 泉 様 | 九州産業大学美術館 |
| 兼平 慎 様 | 株式会社乃村工藝社 |
| 佐藤 和久 様 | 中里村恐竜センター |
| 末田 ゆか 様 | 株式会社乃村工藝社 |
| 宮武 博彦 様 | 株式会社乃村工藝社 |
| 森 慎一郎 様 | 山元町歴史民俗資料館 |
| 森山 賢一 様 | 常磐大学 |

【学生会員】

| | |
|---------|------------|
| 吉田 桜 様 | 鳥根県立穴道湖自然館 |
| 對馬 由美 様 | 文教大学大学院 |